

# 双生児のいる学級集団

教育心理学研究室

三木 安正

天羽 幸子

## 第1章 中学一年生にみられる group の 形成過程と双生児の存在

### 1. 中学一年生にみられる group の形成過程について

われわれは、双生児の行動研究の、いわば基礎工事として、彼等の行動の素地となる学級での人間関係が、中学校入学という新しい集団構成のときから、どのような構造をもって形成されていくかということを知る必要を感じ、まず昭和27年度入学の生徒について行動観察を行うことにした。

この章で報告する行動観察は

1952年 4月 10日～19日

7月 4日～7日

1953年 3月 2日～5日

の三回にわたって行われたもので、観察者はそれぞれの期間とも天羽の他、東京女子大学学生4名である。

観察方法は、10分間の休み時間に、一人づつ5分間の行動を追跡、観察し、メモしたものを後で次に示す所定の観察用紙に記入する。休み時間は一日4回あり、昼休みは二人観察する時間があるので、一日に双生児二組と比較のために一般児一人の行動を観察した。

次頁に示した観察用紙Ⅰには、5分間にみられた行動をそのまま記入するのであるが、更に一日中観察しているうちに、他のものを観察している時にみられた行動などもあわせ考えて、一日の行動として、5頁に示す観察用紙Ⅱのような項目について評定した。

この行動観察とならんて、Sociometryを行ったが、その方法は、「今あなたの親しくしているお友達の名前を三人書いて、親しい順に1, 2, 3と番号をふって下さい」という教示を与えて、各学級全生徒に書かせることとした。

第1回 1952年 4月 19日

第2回 ≈ 6月 4日

第3回 ≈ 12月 15日

第4回 1953年 3月 4日

の4回にわたって、同一方法で行った。その結果はそれとして整理したが、行動観察の結果との比較を行い、それぞれの方法の長短や信頼性をみると役立てた。

被観察者及被調査者

A組(全員 40名 男子 20名 女子 20名)

双生児 {  
一卵性(以下EZと略す)  
  男子1組 女子1名(対偶者はC組にいる)  
二卵性(以下ZZと略す)  
  男子1名(対偶者はC組にいる)  
  女子1名(対偶者はC組にいる)  
異性(以下PZと略す)  
  女子1名(対偶者はB組にいる)

一般児 男子 17名 女子 17名

B組(全員 40名 男子 20名 女子 20名)

双生児 {  
EZ 男子 1組  
PZ 1組, 男子 1名(対偶者はA組にいる)

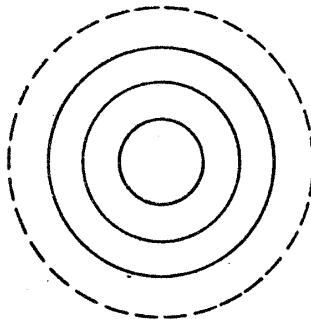
一般児 男子 16名 女子 19名

## 観察用紙 I

双 单

月 日 (曜) 記録者 No.

[集団の構造]

参加度

集団のまとまり  
よくまとまって |————| ただ集ってい  
いる

いつ = 時 分から 時 分  
どこで = 教室 廊下 運動場( )  
だれと = 独りで ⑩と

どんなキッカケで {  
どんなことを =  
人位で { ⑩ ≈ ⑩ ≈

集団に入った場合

積極的に参加	— —— —— —— ——	消極的
うけ入れられる	— —— —— —— ——	歓迎されない
自由奔放	— —— —— —— ——	えんりよがち
遊びにとけこむ	— —— —— —— ——	熱心でない
まとめる	— —— —— —— ——	ぶちこわし
いじめる	喧嘩を する	いじめられる
人気者	— —— —— —— ——	きらわれ者
ボス的, 自己中心 的	— —— —— —— ——	他人の意志をおもん じる
リーダーになる	— —— —— —— ——	従属的

集団にはいらぬ場合

集団に働きかける	— —— —— —— ——	無関心である
集団からさそいか ける	— —— —— —— ——	忘れられている
ひとりを楽しむ	— —— —— —— ——	淋しそう
⑩ { ⑩に対する結びつき ⑩と組んで他に対抗する	密 無 離 しない	
図 { 図に対する結びつき 図と組んで他に対抗する	密 無 離 しない	

経過

註 双………双生児をいみする  
单………一般児をいみする

⑩………対偶者をいみする  
図………対偶者以外の双生児をいみする

## 観察用紙 II

No.

双单月(曜)記録者

氏名		A	B	
◎同志の関係	いつも一緒に (意識的に離れていようとする)			
	一方が支配的である (従属的である)			
◎と集団との関係	二人で組んで (加入)に対抗する (集団)			
	二人で同じ (個人)に結びつく (集団)			
	二人別々に (個人)に結びつく (集団)			
	他の団との関係			
集団における参加度・安定性・協調性・指導性	積極的に参加する (消極的)			
	集団から快く受けられる (余り歓迎されない)			
	集団の中で自由奔放にふるまう (おじおじしている)			
	遊びにとけこむ (余り熱心でない)			
	まとめ役 (ぶちこわしをする)			
	いじめる 喧嘩をうる (いじめられる)			
	人気ものになる (きらわれものになる)			
	ボス的自己中心的 (他人の意志を重んじる)			
	リーダーになる (従属的である)			
	集団における総括的参加度			
集団の種類	集団の構成人数(リーダーの氏名)	人( )	人( )	
	集団のまとまり			
	クラス全部の集団との関係 中心的 附属的 孤立的			
集団にはいらぬ	集団に働きかける (無関心である)			
	集団からさそいかける (忘れられている)			
	ひとりをたのしんでいる (淋しそうである)			
備考	遊びの内容(A ) (B )			

三段階評定

五段階

三段階

五段階

C組(全員 40名 男子 20名 女子 20名)

双生児  $\begin{cases} EZ \text{女子} 1\text{組} 1\text{名} (\text{対偶者は A組にいる}) \\ ZZ \text{男子} 1\text{名} (\text{対偶者は A組にいる}) \\ \quad \text{女子} 1\text{名} (\text{対偶者は A組にいる}) \end{cases}$

一般児 男子 19名 女子 16名

であって、双生児はすべて被観察者となっている。

観察の結果は、(1)group のわかれ方と leader, (2)group の特徴, (3)group 間の関係, (4)孤立者の 4 項目にまとめた。

同一学級の男女の間にはいずれの学級でもほとんど交渉がみられなかつたので、これを各学級、男女別に記述した。

### 中学一年 A組 男子

第一回行動観察(1952年4月10日～19日)

group のわかれ方と leader

個人的な結びつきは殆んど見られず、級全部の男子が一人の leader を中心に、大きな漠然とした group を形づくっている。その leader は江○という秀才型の生徒で入学式の時一年を代表して答辞を読み、学級委員をしている。江○自身が group に働きかけて leader の位置をしめているのではなく、まわりにみんなが集つてくるのである。追従者として目立つものに相○がいる。

group の特徴

殆んどまとまった遊びをせず、何かの事件を中心始終動揺している。

行動観察に異常な関心を持ち、観察がはじまるとき、それを意識した行動をとり、また観察されている双生児を観察者からかくそうとしたりする。

このような観察者への異常な関心は、この組の教室が三階にあり、校庭から一番離れていたために休憩時間に運動場に出る余裕もなく手持無沙汰のために観察者に目をつけたものと思われる。

group 間の関係

group の形成が行われないため group 間の関係は見られない。男女の間には殆んど交渉がなく、男子は女子に対して時々強圧的態度を示す。

孤立者

以上のように組全体が分化されず漠然と動いて

いるので、孤立者ははっきり判らない。

第二回行動観察(1952年7月4日～7日)  
group のわかれ方と leader

group は大きく二つにわかれている。一つは江○、相○を leader とする大きな group で、他の一つは、小○、織○、双生児(以下略す)である野○の group である。後者には leader と名付ける程のものはないが野○がやや指導的である。前回の観察においては江○の追従者の人であった相○が江○と並んで leader となつてゐる。

group の特徴

大きい方の group は主にピンポン、野球などをしている。動きもこれらの遊びを中心にして前回よりもはるかに組織的で活潑になった。しかし群衆的、野次馬的 member が多く、group としてのまとまり方は弱い。一方少人数の group の方は、group としてのまとまりをみせてきている。それではさきの大い方の group はこの小さい方の group に属さぬものをみんな集めたという感じもある。

小さい方の group はピンポンなどの時には時々大きい group に合流することもあるが、これが終るとすぐ離れてしまい、まとまった遊びはあまりせず廊下や教室でぶらぶらしている。

行動観察に対する関心は前回に比して少くなり、あまり騒ぎ立てなかったが、他の組に較べれば依然として関心は強い。

group 間の関係

お互に無関心である。小さい方の group も大きい方の group に追従したりすることなく、我が道を往くといった態度で、その間に上下的、又は反撥的なものではなく平行関係を保っている。

孤立者

大きい group がまだ group らしいまとまった形をとっていないため、女子の孤立者のように席についたきり遊びに這入らずはっきり孤立しているというものはなく、何かしら動いているので男子の孤立者はなかなか擋みにくい。

第三回行動観察(1953年3月2日～5日)

### group のわかれ方と leader

相〇が組で一番ピンポンがうまく、そのためか運動の不得意な江〇をしのいで活潑な leader となり、未だに十分組織化されず漠然とした大きな group を率いている。

今まで大きい group の leader であった江〇はこれとやや離れて、織〇、新〇、小〇、これに野〇が時々加わる小 group に属する。この group は前回よりも、member がふえ、大きくなつた。その他2,3人同志の小さい group が点在する。

### group の特徴

A, B, C三組を通じてこの組はもっとも group 化がはっきりせず上記のような group も何か事件がおこると級全体が一緒になって動き、特に2,3人の小 group はなかなか揃えにくい。従って group の性質も相〇の group が運動を中心とするので、派手で活動的なのに対して、江〇の group はこれよりまとまっているが、静止的である。

### group 間の関係

上述のような運動を中心として group の特色が出ているので、江〇の group は何か押されがち、たまにピンポンなどに加わっても、特に江〇は下手なので、みんなに野次られて小さくなり以前のすばらしい leader ぶりはみられない。

### 孤立者

行動観察においては目立たない。

### 中学一年A組 女子

#### 第一回行動観察 (1952年4月10日~19日)

### group のわかれ方と leader

入学直後の4,5日は席の近くの者同志が雑談したり、一緒に水を飲みにいくという程度で、全く組織的な動きはなかったが、10日もたつと、アウト鬼を中心に、組全体の女子が一緒に行動し、漠然としたgroupではあるが、決った遊びもせぬ男子に比べて、はるかに活潑な動きを示していた。

leader は男子のようにはっきりせず、遊びの場合に、原、船〇、谷の存在が目立つという程度。

### group の特徴

行動観察に対しては男子のような関心を示すこ

となく、むしろ遊びに夢中して無関心に近い。全体に明るく、活潑である。

### group 間の関係

観察できない。

### 孤立者

特に目立たぬが平〇〔団〕と磯〇〔団〕及び若〇などは全体の動きから離れていた。

### 第二回行動観察(1952年7月4日~7日)

### group のわかれ方と leader

少人数のgroupが沢山出来る。大きくわけてみると、leader原を中心としたgroupと平〇、大〇のgroupにわかれる。そしてこの二つのgroupが更に2,3人の小さいgroupにまとまりつつあるように思われる。原は次第にleader的態度が、顕著になり、遊びなどもまっ先に計画し、行動する。平〇、大〇はそれほど顕著でなく、漠然とした寄り集りのgroupの中で目立っている程度である。

### group の特徴

原のgroupはいつも一緒に行動し、そのまとまり方は平〇、大〇のgroupに比して密である。

平〇、大〇のgroupは原のgroupに比し、大きいが、寄り集り的で、いくつかの小さいgroupにわかれる可能性をはっきり示している。従ってその結びつきも弱い。

前回のように級全体で遊ぶことはなく、雑談したりする程度で、活潑さは少なくなった。

### group 間の関係

平行、独立的。原のgroupの方が、雑談するにしても、大声で笑ったりして目立つが、平〇のgroupもこれに従属しているようなことはなく、無干渉である。

### 孤立者

平〇〔団〕は前回よりも一そくgroupから離れて読書しているのが目立つ。(平〇妹〔団〕はC組にいるが、特に目立つ方でないが、groupの一員となっている)若〇はきらわれて、孤立している。

### 第三回行動観察(1953年3月2日~5日)

### group のわかれ方と leader

group のわかれ方が、かなりはっきりしていく。

原, 船○, 山○などの7, 8人のgroup。leaderは船○, 原。

雨○, 磯○, 谷, 八○などの4, 5人のgroup。leaderは雨○, 谷。

今○, 平○, 大○, 内○の4人のgroup。leaderは平○, 今○。

#### groupの特徴

(1) 原のgroup 主に縄とびをして遊び, 活潑で目立つgroup。leaderは運動の得意な船○, 原も加わってはいるが, あまり上手でなく, 多弁である。

(2) 雨○のgroup 殆んど何もせず, いつも昼休みなど一番おそくまで教室に残っているのが見られる。雨○, 八○は比較的他のgroupとも接しているが, 磯○はこのgroupの人には限られ, 谷はこの磯○を追っている。

(3) 平○のgroup 特に平○と今○とは親友らしく, 通学のときも学校で何かをする時にも一緒に行動する。leaderは平○, 時々非常に能弁になり, 前回の孤立者の影はみられない。主になわとびを使って, かなり活潑である。

#### group間の関係

原と平○のgroupは縄とびをするので, 時々一緒に遊ぶ。雨○のgroupも加わることもあるが, いつも後から加わり, この二つのgroupからはやや離れている。

#### 孤立者

前回のような顕著な孤立者の姿はみられず, いずれかのgroupの周辺的存在として吸収された形である。雨○のgroupは教室にいることが多いので, 孤立的傾向のある者はこのgroupに加わることが多い。

### 中学一年 B組 男子

第一回行動観察(1952年4月10日~19日)

#### groupのわかれ方と leader

入学当初においては席の近いもの同志が, かたまり合って, いくつかの小groupにわかれ, 休み時間などに, 少し廊下を走りまわっている程度であったが, 4, 5日すると吉○兄弟[※]をのぞいた殆どのものが, 野球を中心とした一つの大きなgroupにまとまった。このleaderは星○[※]と玉○で底抜けに明かるく活潑で, 彼等の勢力的

な行動にみんながひきつけられていく形である。

吉○兄弟[※]は二人だけで遊んでいる。

#### groupの特徴

野球というはっきりしたゲームを行っているので, 動搖は少く, よくまとまっている。また野球に熱中しているので, [※]に対しても特別扱いはない。

[※]吉○兄弟はきまったく遊びをせず代り番に馬とびをしたり, 押しくらをしたりして, クラス全体からみると取り残された感じであるが, 彼等自身は一向平気で, 十分楽しんでいる。

#### group間の関係

入学当初の漠然としたgroupの間では, その関係もはっきりしなかったが, 大きな野球のgroupができ, 吉○兄弟[※]がこれと離れてからは両者はお互に無関係である。

#### 孤立者

吉○兄弟を孤立者と見なければ他に孤立者はない。他は野球groupの中に含まれてしまう。

### 第二回行動観察(1952年7月4日~7日)

#### groupのわかれ方と leader

野球の試合が近日中に迫っているので, これに夢中になっている十数名のgroupがある。このleaderは前回の観察の時と同じく玉○, それに組の学級委員をしている村○である。前回には玉○と同じくleaderの位置にあった星○[※]は野球groupから完全に離れ, 大○, 矢○と時々一緒にいるといった淡いgroup関係ができる。吉○兄弟[※]は前回では彼等二人だけであったが, 今回は, これを取りまく二, 三人のものが現れ, 吉○[※]の兄の方がleadershipをとっている。

#### groupの特徴

野球のgroupは人数も多く, その点でも圧倒的であるので, 活潑であり, 試合というはっきりした目的をもっているので, よくまとまっている。

星○のgroupは, groupというよりも, 一緒にいることが多いものといった方が適切で, 何もまとまった動きはなく教室に残って話をすることが多い。

吉○兄弟[※]のgroupは依然として野球には全く関心なく, 取っ組みあい, ふざけっこなどのご

く子供らしい遊びをしている。

#### group 間の関係

野球 group が人数、活潑さ、いずれにおいても他を圧しているので、他の group は取り残された感じであるが、吉〇〔㊁〕 group は小さいながらも一個の group として判然としている。星〇〔㊁〕の group は、大〇、矢〇が時々野球 group に合流することもある。

#### 孤立者

判然とした孤立者はみられぬが、星〇〔㊁〕は全く野球をせず、又吉〇のような子供っぽい遊びにも加わらないので、時々孤立していることがある。

#### 第三回行動観察(1953年3月2日～5日)

##### group のわかれ方と leader

野球熱が少しうすれたためか、前回よりまとまり方は弱くなった。

やはり野球を中心とした玉〇の group と、遊びらしい遊びをしない石〇、久〇の group があり、この中に星〇、大〇、矢〇も含まれる。更にこのいずれにも属さぬ吉〇兄弟〔㊁〕の group がある。

##### group の特徴

玉〇の group は純粹に野球をするものと、野球はしないが、何となくつながりを持っている周辺的存在から成り立ち、前回ほどのまとまりはない。しかし、人数の点では、他とくらべものにならず、組の代表的 group である。

吉〇兄弟の group は前回よりも group としての独立性を欠き、玉〇又は石〇の group に属することもある。しかし交渉の多いのは石〇の group で、この吉〇兄弟を中心に、内〇、浅〇、磯〇〔㊁〕といったこれも所属不定のものが寄り合い、もやもやしたかたまりをなしてふざけている。

石〇、久〇の group は、はっきりした遊びをせず、上記の二つの group に属さぬものが集っている感じである。従ってもっともまとまらず、雑談、ふざけっこ程度である。

##### group 間の関係

全体にまとまりが弱くなつたので、group 間の関係も、時と場合によって流動的になった。しかし野球 group と石〇 group 吉〇 group との間は割合はっきりわかっている。

#### 孤立者

各 group の周辺的存在が多いので、判然とした孤立者は目立たない。

#### 中学一年 B 組 女子

##### 第一回行動観察(1952年4月10日～19日)

##### group のわかれ方と leader

この組の男子が野球を中心にして、group 構成の上で大きな動きを示したのに反して、女子は殆んど group をつくらず、全体に不活潑であった。入学当初においては、小さな group が時と場合によってしばらくの間つくられる程度であったが、次第に全体的なまとまりをみて、一つの遊びを一緒に行うこともあった。しかしこの結びつきはもろく leader の存在も明らかでない。無理にさがすとすれば、相〇、伊〇といえよう。

##### group の特徴

男子の元気のよいのに比し、全体に沈滞しており、読書したり、雑談するものが多く、それぞれ自分の殻の中にとじこもり、自分勝手のことをしているという感じである。

##### group 間の関係

group にわかれないためその関係もない。

##### 孤立者

混然とした状態なので、孤立者はわからない。

#### 第二回行動観察(1952年7月4日～7日)

##### group のわかれ方と leader

前回の観察の時には、大勢一緒になってゴム遊びなどをしたこともあったが、この時期にはそのように組全体として動くことはなく、2,3人の group がその都度かたまって行動する程度で、遊びらしい遊びは、前回よりもなお見られなかった。

こういう group の中核的存在として砂〇がいる。彼女は全然自分から働きかけることはないが、人が机のまわりに寄ってくるので、自分自身は傍聴者程度であるが、自ら雑談の中心となる。その他には leader としてとりたてていう程のものは見られない。

##### group の特徴

砂〇の group は member の多いせいか目立つ。中学1年というような子供らしい活潑さは殆んどない。その他の group は教室に残ってい

るもの、運動場をぶらぶらするもの、千差万別であるが、いずれもまとまった遊びはしない。

#### group 間の関係

上述のように group が不安定、不活潑なので group 間の関係というほどのものはみとめられない。

#### 孤立者

西○、川○の 2 人は孤立しており極めて不活潑である。

### 第三回行動観察(1953年3月2日～5日)

#### group のわかれ方と leader

前回にくらべれば明らかに group 化してきた。星○妹[PZ]を中心とした 7,8 人の group と、今○を中心とした背の低いものの group の他、柘○を中心とした小さい group など、2,3 の小 group が点在している。

#### group の特徴

(1) 星○の〔団〕 group 組の代表的 group で、member も他を押し、活潑に騒ぐが、この傾向は主として leader 星○の性質によるものと思われる。彼女はワンマン的 leader で、専制的態度で接し、これに member は完全に威圧されてまとまっている。前回に leader として目立った砂○もこの group の member となっている。

(2) 今○の group 星○の〔団〕 group に比し、無邪氣で、子供っぽい。

#### (3) 柘○、その他の group

上述の group に比し独自性を欠き、一つの group として行動することもあるが、上述の group に統合されてしまうことが多い。

#### group 間の関係

上述の様に、星○〔団〕今○の group が代表的 group となり、他の group はこれに従属する傾向がある。

#### 孤立者

大きい group に従属する小 group の中に含まれてしまい、孤立者として目立つものは見られない。

### 中学一年 C 組 男子

#### 第一回行動観察(1952年4月10日～19日)

#### group のわかれ方と leader

入学当初は一人二人とかたまって、なんとなくくつついていたが、入学後一週間もたつと、5,6 人の元気な子供が馬とびを始めこれに組全体の男子が加わり、一団の大 group となった。

leader として特定の個人を指摘することは出来ないが、特に指導的発言の多いものは加○と、石○である。

#### group の特徴

特定の遊びを中心に集っているので、各 member 間のデリケートな交渉は見られない。group の質としてはごく未分化な雑多な集りであるが、その反面遊び中心に安定している。

#### group 間の関係

組の殆んど全員が、一つの遊びに加わっているので、見られない。

#### 孤立者

この馬とびに加わらず、これを傍観しているものとして、小○、井○、宮○が見られた。この孤立者の間にはなんの関連もない。

### 第二回行動観察(1952年7月4日～7日)

#### group のわかれ方と leader

個々の特色ある group 化は依然として見られず、前回の馬とびに代って、ピンポンに組全体のものが熱中している。これもまた休み時間になると必ずするといったように習慣化しているので、特定の leader はないが、特に熱心で活潑なものとして石○がみられる。

#### group の特徴

前回と全く同様で、個人的結びつきは殆どないといってよい。ピンポンを中心にまとまる。

#### group 間の関係

group 化が行われないため観察できない。

#### 孤立者

これを傍観しているものとして、井○、梅○が見られた。前回の孤立者小○、宮○は一応 group の中にはいっている。

### 第三回行動観察(1953年3月2日～5日)

#### group のわかれ方と leader

前回まで見られた組全体に流行するようなまとまっていた遊びではなく、ふざけっことか、ちょっとし

たキャッチボールなどの遊びによって大勢になったり、小人数になったりして動いており、はっきりした group は未だ認められない。しかし 2, 3 人の小さい group が出来つつあるようである。

leader としては無邪気で活潑な 石○、橋○、これに従来まで傍観者に属した小○○などがあげられる

#### group の特徴

前回まではただ一つの遊びにまとまっていたが、今回では遊びによって、常に動搖しているので、不安定である。

#### group 間の関係

group は未だ未分化であるが、上述の leader とこれに緊密なものが、かなりの指導権を持ち、これに野次馬的についてまわる周辺的存在との間に、無意識的な上下関係が見られるようである。

#### 孤立者

梅○と大矢〔団〕が孤立している。大矢〔団〕は読書好きで、あまり人と行動を共にせず人から離れている。

### 中学一年 C組 女子

#### 第一回行動観察（1952年4月10日～19日）

#### group のわかれ方と leader

この組は、入学当初から大きく二つの group にわかれ、浅○姉妹〔団〕がそれぞれの leader 又はこれにつながる中心的位置をしめている。入学後二週間ほどたつと、ゴムとびを仲立ちとしてこの二つの group が一緒になることもあったが、group の別はやはりはっきりと存在した。

#### group の特徴

二つの group にわかれているが、質的な差はなく、ともに活潑で、お手玉をしたり、ゴムとびをしたりする。

#### group 間の関係

別に反撥しあったりすることなく、まことに自然にわかれてしまったような形で、leader やその中心的人物は変わらないが、その他のものは、時によって参加する group が変わる。しかし、このために、なんのトラブルも起らない。組の大半のものは、group にわかれていることをあまり意識していないようである。

#### 孤立者

やや無視されているものとして谷がみられる。

#### 第二回行動観察（1952年7月4日～7日）

#### group のわかれ方と leader

第一回の行動観察の時よりも、少人数の親しい group ができかかったようだが、その中で、はっきりみられるものは浅○姉〔団〕を中心とする 5, 6 人の group で、もっとも大きい。遊ぶ時にはこの浅○姉〔団〕の group 中心になって、組の大半の女子が一緒に遊ぶ。しかし浅○妹〔団〕と鈴○とはこの時にも一緒にならず常に孤立している。

#### group の特徴

教室が運動場にもっとも近いせいもあるが、休み時間教室に残っているものは、全然なく、みんな活潑にゴムとびをする。

ただ浅○妹〔団〕と鈴○とはこれに加わらずクローバーをつんだりしてあまり運動しない。

#### group 間の関係

上述のように小さい group にわかれつつあるようであるが未だ判然と把握されるまでに到らず浅○姉妹がはっきりわかれ、浅○妹〔団〕と鈴○が明らかに、クラス全体から離れている。

#### 孤立者

浅○妹〔団〕と鈴○は自ら離れ、孤立しているのであるが、前の観察の時から、きらわれかけていた谷は、はっきりと組のものからだけものにされている。

#### 第三回行動観察（1953年3月2日～5日）

#### group のわかれ方と leader

前回の観察に比し、目立って group のわかれ方がはっきりしてきた。檜○を leader とする大勢の group 浅○姉〔団〕の少人数の group、それに浅○妹〔団〕、鈴○、児○の group に別れる。

#### group の特徴

檜○の group と浅○姉の group は、ともに活潑で、いつも大勢でゴムとびなどをして遊ぶ。浅○妹の group は、教室に残って話をしたり、することが多く、活潑にとびまわることは少い。

#### group 間の関係

上述の三つの group は遊ぶ時には檜○の group

と浅○姉[団]の group が一緒になり、活潑に遊ぶが、その中で福○、高○の二名はあまりこれに加わらない。

浅○妹[団]の group は前回程判然と孤立していないが、あまり一緒にならない。

#### 孤立者

谷が group の周辺に加わることができるように、その他には孤立者として取り上げるものは見られない。

### 1. 行動観察の結果の考察

#### 1. group の構成

- a. 男女ともに入学当初は席の近いもの、又小学校が同じだったというような、外的な条件を原因として、少人数の group を形成する。入学後10日ぐらいになると、このむすびつきが次第にくづれ、組全体のものが、馬とびとかピンポンという特定の遊びを中心に、漠然とむすびついて行動をともにし、その後、個々の group にわかれ始める。この時期は、夏休み以後に顕著にみられる。
- b. 初期においては、男子は組全体で行動する傾向がみられ、非常に強力な leader がないかぎり、人間中心というよりは遊び中心（例えば野球、馬とび）にまとまる傾向が強い。group にわかれれる時期は、女子に較べて明らかにおそい。
- c. 女子は早くから group にわかつてまとまろうとする傾向が強い。そして、それぞれの group に早くから leader ができる、leader 中心に結合する。
- d. 男女間の交友は、授業前後、席の近くのものの同志が話しあう以外は、殆んどみられず、多くの場合、異性の行動に全く無関心であるものが多いが、なかには男子が暴力で、女子を排撃するものもある。この傾向は、一年後にも同様である。

#### 2. leader

入学当初は成績のもっとも優秀なものが、leader になり、このなかには自ら働きかけず、他のものが自然にまわりに集ってきて中心的存在となるものもある。これが、第二回、第三回

の観察になると成績もよく、更にスポーツもでき、活潑なものが、はっきりした leadership を持った leader になる傾向がある。これは入学当初は組全体の動きが活潑でなく、スポーツもあまりしないため、ただ成績のよいものに対する尊敬の気持から優秀なものまわりに集まるのであろう。このため group のむすびつきがそろそろはっきりする夏休み前後に、leader の交替がおこり、前の leader の優秀児のなかには、スポーツの時など、みんなから嘲笑され leadership を失うものもあった。

leader になるものの性格は、何がその group 形成の媒介かということと関連する。中学一年生の group では、スポーツなどがその主媒介となる。

#### 3. 孤立者

- a. 男子は、初期の行動観察では、組全体での行動が多かったため、孤立者の存在は、きわめて判りにくかったが、後にやや group としてのまとまりができかけてくるとこれを傍観している孤立者が目立ってくる。そういう孤立者は、A組では三回の観察を通してはっきりみられず、B組では2,3名、C組でも2名ほどみられた。
- b. 女子は、これに反して、初期の行動観察では組の大部分のものが、なにかの遊びを始めても、これに加わらず、椅子にぼんやり坐っているような孤立者が目立ったが group にわかつてると、それまでの孤立者は孤立者同志で group をつくったり、又 group の周辺的存在として落ちついてしまい、あきらかに孤立者として目立つものはきわめて少い。例えばA組の雨○ group が代表的なものであり、他のB、C組においても、第三回の観察では、孤立者としてとりあげられるものは1名もみられなかった。

#### 4. 双生児の存在

- a. 昭和27年入学児の中にはEZ男子2組、女子2組、ZZ男子1組、女子1組、PZ2組、計8組の双生児が在学しているが、それらは各40名の学級に、A組ではEZ男子1組、女子2名、(他の組にわかれている)ZZ男子1名、女子1名、PZの女子1名、B組ではEZ男子1組、PZ

1組、他にP Zの男子1名、C組ではEZ女子1組、他に2名、ZZの男子1名、女子1名で双生児は一組に5,6人おり、そのうち一対で同じ組にいるのは、男子EZ2組、女子EZ1組、P Z1組である。A組の男子以外は学級中の双生児については殆んど関心を示さず、したがって双生児がいるために組の中に特別な雰囲気ができるということはみられなかった。A組の男子においては、双生児の行動観察に異常な関心を持ち、これを観察者からかくそうしたりして、そのため双生児は組の行動の中心になり、人気の的であったが、これはA組の教室が運動場からもっとも遠く、遊ぶのに不便であったという特殊条件からで、みんなの興味が遊ぶことに移ると、双生児の存在は全く影響を示さなくなった。

b. 彼等の group との関連は次の如くである。

EZ男子繁○(兄弟ともA組)

入学当初は双生児であるために組のものの関心を集めていたが、これは同格というよりも年下の子供に対するような扱われ方で、group に対していつも従属的である。

EZ男子吉○(兄弟ともB組)

group から離れ、二人だけで遊ぶ。他のものの group 形成には全く無関心で、二人だけで行動することがこの上なく嬉しいらしく、組全体からみると、この二人は独立しているとも見える。

EZ女子浅○(姉妹ともC組)

二人とも全然別々の group に属し、それぞれの group の leader 格になる。組の殆んど全部のものが一緒に遊ぶ時でも、二人は一緒に遊ばない。

EZ女子平○(A児は、A組、B児はC組)

A児は読書好きで休み時間も本をよんでいたため、孤立がちであつたが、第三回の観察では親友ができ、小さい group の一員として安定した。これに反してB児は入学当初は group の中で活潑に行動し、leadership もみられたが、次第に積極性を失い、遊んでいる時にはかなり遊びにとけこんでいるが、固定した group はない。

ZZ男子野○大○(姓が異なる)(A児はA組  
B児はC組)

A児は少人数の group に属し、leader 格である。繁○兄弟と同じ組であるが、玩具のように扱われることなく、むしろ一目おかれている。B児は非常に読書好きで一日中本ばかり読んでいることが多い。しかし、遊びに加わると、かなり活潑に、自分の要求を主張したりする。しかし全体としてみれば孤立的である。

ZZ女子谷○(A児はA組、B児はC組)

A児は一応固定した group (孤立的傾向にあるもの同志の group) に属しているが、こちらから積極的に group を追いかけていく方で、きわめて従属的である。同じ双生児の磯○と親しい。B児は行動が野性的なために、友達からきらわれ、いつも孤立がちである。

P Z磯○(A児はA組、B児はB組)

A児は入学初は孤立者であったが、次第に同じ孤立的傾向にあるもの同志で group をつくり、自ら働きかけないが、その主要 member となっている。B児は組の代表的 group である野球 group の一員で活躍していたが、次第にこの group からはなれ、吉○兄弟に近づいている。

P Z星○(兄妹ともB組)

A児は入学当初は磯○Bと同じ野球 group のピッチャーであったが、第2回観察後はこれから離れ、野球 group とは対称的な不活潑な group に加わったり、属する group が一定していない。B児は入学当初は友達の遊んでいるのに全く無関心のように1人で自由に動きまわっていたが、次第に積極的になり、活潑な group の独裁的な leader となる。

## 2. 行動観察とSociometryの結果との比較

行動観察と平行して、4月、6月、12月、3月の4回にわたり、Sociometryを行った。その結果行動観察では group の形成が殆んどみられない

のような場合でも Sociometry の結果ではかなりはっきりとした group ができているように見られる場合が多くみとめられた。特に、そうしたことは入学当初にいちじるしく見られた。Sociometry では実際にはそれほど深い根拠もなく、選んだ相手でも、結果としては、はっきりした形で表現されるので、あたかもはっきりした group が形成されているようにみえるということもあり

### C組 男子の場合

男子の中では group 形成が最もおくれている。

## 行動觀察

- 4月 入学当初は一人、二人とかたまって何となくくつついていた小groupが、10日もたつと馬とびを中心、男子の大半が一緒になる。強力なleaderはおらず、遊ぶことで集っている。

- 7月 馬とびにかわり、ピンポンに、熱中している、個人的むすびつきは殆んどなく、ただ一緒に遊んでいるだけのようである。この外に、2,3人傍観者があるが、これらもgroupを作っていない。

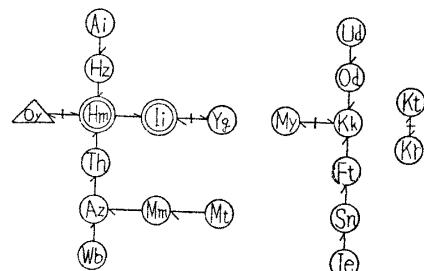
- 3月 Ii, Az などのような無邪気で活潑な子供を中心に、遊びによって大勢になったり、小人数になったりして行動している。2,3人の小さい group もできかかっているようであるが、はっきり判らない。

うるのである。ともかく group 形成の研究方法として行動観察と Sociometry とは対蹠的な関係に立つ方法であるので、その両者の方法による結果を比較してみると、研究方法の吟味にもなるわけであるが、ここでは、一、二の場合について、それぞれの方法によって得られた結果を対比して示し、さらに全体的に両者の結果を概括して比較してみる。

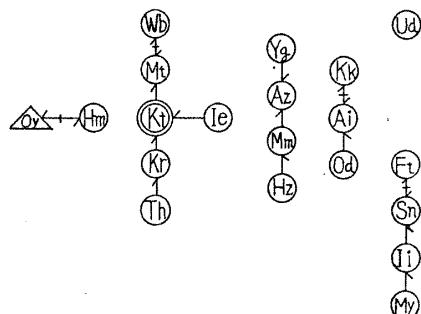
運動(遊び)を中心に動いている。

Sociometry

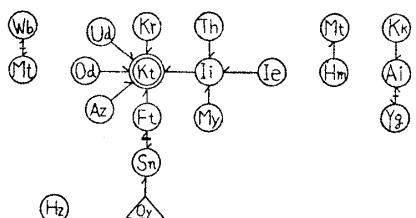
4月



6月



3月



△印は双生児、○は、社会距離点の最高のものを示す。

### A組 女子の場合

比較的早くから group がはっきりわかっていた。

た。はじめは小人数であったが、夏休以後は 5,6 人の三つの group にわかれた。

## 行動観察

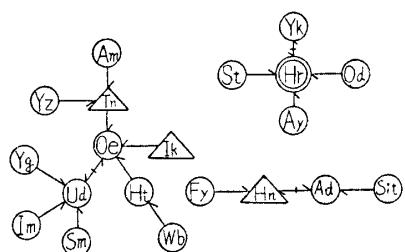
4月 入学当初は席が近いもの同志が、雑談したり、用事がある時にだけかたまって行動する程度であったが、10日もすると、アウト鬼を中心に、組全体の女子が一つの遊びをして活潑に動いた。

7月 少人数の group にわかれ、4月のように、組全体で遊ぶことはない。大体、Hrを中心とした group, Oe, Htを中心とした group にわかれ、それぞれが、また細い group にわかれている。

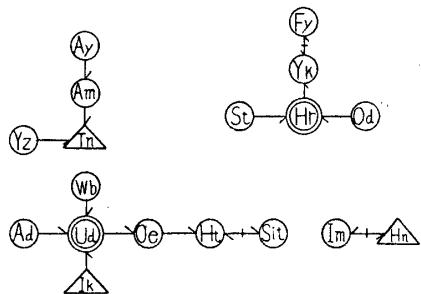
3月 はっきり三つの group にわかれている。背が中位から、小さい人で、なわとびをして活潑に遊ぶ Hr, Fy, Yk, などの 7,8 人の group。  
時々遊んだり、本をよんだりしているが、いつも必ず行動をともにする Oe, Hn, Im, Ud の 4 人の group。あまり遊ばず不活潑な Am の 4,5 人の group。  
この三つの group は、いつも別々に行動する。

## Sociometry

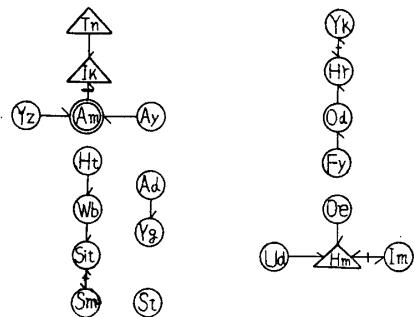
4月



6月



3月



△印は双生児、◎は社会距離点の最高のものを示す。

以上のような比較を各組男女別に要約した叙述

によってみると、次のようになる。

第 1 表

A組男子

	行動観察	Sociometry
group の わかれ方	入学当初、一人の leader 中心に行動していたが、第2回観察では新しい leader が生れ、組の大多数を率い、前の leader の group は孤立気味である。	観察では group 化がみられぬ入学当初でも、かなりはっきりと group にわかれていた。
group の特徴	新しい leader 中心の group はピンポンによってまとまり、これに加らぬ小人数は leader 中心に、あまり遊ばない。 全体に leader 中心で、leader が変るとともに group の特徴も変る。	1,2回の S. M では相互選択多く、group としてのまとまりをみせていくが、3回の S. M では小 group 亂立し、4回の S. M で再びまとまりをみせる。 group の構成と成績と関連がたか。

leader (star)	初期は成績がもっとも良いものが、leaderになるが、2,3回の観察では、成績もよく、スポーツも達者なものがleaderになる。	大starの移行が顕著で、観察と一致する。
孤 立 者	大勢の group に含まれてしまうため、殆んど目立たない。	成績の比較的上位のものと、最下位のものが、孤立者になりやすく、観察よりも、はっきりあらわれている。
双生児の存在	この組の男子は特に双生児の観察に興味をもっていたので、初期は組の注目的であり、繁〇兄弟は特に玩具のようにかわいがられたが2回の観察後、遊びに関心がうつるとともに、双生児の存在は目立たなくなった。	三人とも孤立気味で、特に繁〇兄弟は、3,4回の S.M では完全に孤立している。 野〇はあまりえらばれていないが、成績優秀の star と相互選択している。

第 2 表

B組男子

	行 動 観 察	Sociometry
group の わかれ方	強力な leader ではなく、野球をするもの、しないものにわかれ、三回の観察を通じて、殆んど変化はみられない。	観察では野球の参加、不参加でわかっているが、S.M では野球 group は常にいくつかの group にわかれている。
group の特徴	野球の group は、非常にまとまっているが、野球熱がうすれると、ただなんとなく group にいるという周辺的存在の多い group となる。 野球をしない group は単純なふざけっこをして動きは目立たぬが member は安定している。	野球 group は一方的選択が多く、S.M の度毎に変動する。野球をしない group は相互選択多く安定している。 group 構成と成績との関連はかなりある。
leader (star)	強力な leader ではなく野球 group では、ピッチャーになるものが leader となる。 野球をしない group では leader 的存在はみられない。	中心的な star ではなく、大体社会距離点 12 点くらいに分散している。
孤 立 者	各 group の周辺的存在として、含まれてしまうため、孤立者は目立たない。	成績の最下位のものがいつも孤立している。又 S.M の度に選ぶ人を変える。
双生児の存在	吉〇兄弟は、友達からはなれて二人だけで遊ぶといった双生児であるが、組のものは殆んど無関心である。	吉〇兄弟はいつも揃って同じ人をえらび、特定の人と相互選択し、安定している。 星〇は一時 star になるあまり目立たない。 磯〇は3,4回のS.Mで吉〇とえらびあう。

第 3 表

C組男子

	行 動 観 察	Sociometry
group の わかれ方	三組の中で group のわかれ方が一番おくれている。 常に組全体のものが、行動をともにしている。	S.M においても、他の組に比べて、group としてのまとまりが少い。

group の特徴	組の大半が、ピンポン、馬とびという特定の遊びに参加し、遊び中心に安定している。 第3回の観察では、この中心的遊びがなくなつたので動搖多く、そのうちに、小さい group の形成されるきしがみられた。	group にわかれていなため相互選択も少く、常に変る。 成績との関連は、極めて低い。
leader (star)	強力な leader はなく、特に活潑に行動するものが目立つ程度である。	star の変動が多く、前回の S.M の star が次回では孤立者になったりする。
孤 立 者	大多数が遊びに加わるのでこれに加わらず傍観しているものは、孤立者として目立つ。	成績の特にわるいものが、常に孤立している。
双生児の存在	男子双生児は大○一人であるので、組のものは、双生児に対して特に関心を示めさない。	観察では大○は読書好きなので孤立ぎみだが、S.M では、常に star 的存在と関連を持っている。

第 4 表

A組女子

	行 動 観 察	Sociometry
group のわかれ方	男子とくらべ、group が早くからわかれ、はじめは小人数の group であつたが、夏休み以後 5,6 人の group となる。	中学1年全体の中で、もっとも、はっきりと group にわかれている。
group の特徴	group は仲良し同志の集りで member は固定している。 成績と関連があり、成績のわるいものは、わるいもの 同志で一つの group をつくる。	相互選択多く、結合はかたい。観察と一致しており、成績との関連が深い。
leader (star)	男子と同様入学当初は成績が最上位のものが leader になったが7月頃には、成績もよくスポーツもできるものが、これと並んだ leader になった。 成績のわるいものの group にはその中の一人が leader になった。	男子と同様、最大 star の人気が、夏休み前に急に低下したが、再びもどる。
孤 立 者	group のわかれ方が、はっきりしているため初期には孤立者が目立つたが、第二回の観察になると、孤立者同志が、一つの group をつくった。	成績の比較的上位のものと、最下位のものが、孤立する。
双生児の存在	入学当初は、双生児に対する男子の異常な関心にあおらわれていたが、次第に無関心になった。	磯○と谷とは相互選択し、平○は、他の group の固定した member となっている。

第 5 表

B組女子

	行 動 観 察	Sociometry
group のわかれ方	1,2回の観察では、殆んど group をつくらなかつたが、3回の観察では大体、二つの group にわかれれる。	観察よりも早く、大きい group と小さい group とが、まとまつた group にわかれれる。しかし、group のわかれ方は行動観察とはあまり一致しない。

group の特徴	group の構成は、leader 中心で、特に、一つの group は、leader に威圧されてまとまり、他は子供っぽい活潑に遊ぶ leader を中心としている。他にこれに従属する2,3の小 group がある。	大きい group は変動がはげしく star は始終変るが、小さい group は、殆んど変わらない。 group のまとまり方と、成績との関連は少い。
leader (star)	二人の leader のうち一人は成績のもっともよいもので、リンマン的 leader であり、他の一人は成績は中位で子供っぽく無邪氣である。	1,2回の S.M では大 star があらわれるが、3,4回では目立たなくなり、群雄割拠の傾向を示し、観察にみられる二人の leader が、特に目立つとはいわれない。
孤 立 者	各々の group の周辺的存在となり、group の中に含まれる。	1,2回の S.M では成績の上位、又は最下位のものが孤立し、人数も多かったが、3,4回ではその中の成績のよいものは star になるものもあり、成績の低いものはそのまま残っている。
双生児の存在	女子双生児は、leader の一人である星○一人だけで、しかも同じ組にいる兄とは全く一緒にならぬので、組のものは、双生児ということは全く関心がない。	星○は1,2回の S.M では目立たなかったが、3,4回の S.M では、star の一人となる。

第 6 表

C組女子

	行 動 観 察	Sociometry
group のわかれ方	双生児の姉妹をそれぞれの leader として二つの group にわかれ、観察の回を重ねるとともに、これが更に小さくわかれれる。	観察される二つの group は S.M では、はっきりしていない。 しかし男子に比べて、早く、小 group にわかれれる。
group の特徴	group の間に質的な差はなく、自然にわかれれており、各々の group の周辺的存在が、時によって属する group を変える。	1,2回の S.M では、鎖状のまとまりのない結合が多かったが、3,4回の S.M では、4,5人づつの group にわかれれる。これは観察では判然としない。
leader (star)	成績よりも、活潑さで group の中心になっている。	star の変動は、4回の S.M を通じて殆んどなく、成績も上位から、中位のもので占められている。
孤 立 者	成績もわるく行動も粗野なものがきらわれ、のけものにされた。	孤立者はつねに、2,3人あり、いつも同じ人で成績の最下位のものである。
双生児の存在	浅○姉妹が、それぞれの group の leader となり、谷○はのけものにされたが、両者とも双生児だからとして特別に扱われたとは思われない。 平○は孤立ぎみ。	浅○はいつも star 又はこれにつぐくらいの人気をえており、平○、谷○は孤立者になることが多い。

以上の資料から行動観察の結果と Sociometry の結果を比較してみると、全体的にみればある程度一致しているように思われる。しかし行動観察では各観察者が担当している生徒については非常にこまかくみられるが、全体的な group 構成については、観察の眼が行きとどかない。このため行動的に目立つものに目をうばわれて、その生徒の group での位置づけを過大評価したり、又反面目立たぬものは落しがちになる。行動観察では

或 group の追従者とみられているものが Sociometry では、leader 的位置にあるということもある。

このような行動観察と Sociometry との結果の相異は勿論、観察の不充分、Sociometry のとり方の不備ということも考えなければならないが、行動観察は一応実際の行動をとらえているのに対して Sociometry は生徒たちの頭の中で描かれたものでできた group 構成であるということ

がいを考えてみなければならない。

・ 例えば行動観察での group 構成は、その場面場面によって、かなり異なるものもあるが、Sociometry では、一定の場面を限定していないので、選択する時に考える場面がまちまちであり、現実に存在するいろいろの人間関係の障害がないので、ある場合には抽象化された場面での選択が行われ、また願望的選択も多いことになり、行動観察 Sociometry とは必ずしも一致しないことになるのであろう。

・ しかし group の構成およびそのなかの個人の行動についてみる場合、実際場面での行動をみるとともに、彼等の内心に構成される集団構成をも合わせて考察することは、行動の研究上、きわめて必要であることが、この二つの研究方法の結果を比較して考えられた。

この両者の結果を比較して、相異のあらわれている点を、二、三あげると次のようである。

1) 上でも述べたように Sociometry では、成績のよいものに対する尊敬、又これ等のものと仲良くなりたいという願望を示す選択が多く、行動観察の group 構成と一致しない場合がある。例えばB組女子におけるように、成績のよい性格のおとなしい子が組の女子から圧倒的に多く選ばれているが行動観察では、そういう group は殆んどみられない。

2) (1)のような傾向は、とくに入学当初に多くみられた。A組男子は行動観察によると、はじめのころは強力な leader 中心に行動しており日を経るに従って、各人に応じた group を作っていったことになっているのに対して Sociometry ではいつまでも成績優秀なものを追っているものがあった。

3) 行動観察と Sociometry の結果の大きな相異は、孤立者にみられる。行動観察での孤立者が Sociometry では star の1人であったり、逆に Sociometry の孤立者が行動観察では寵児であったりする。例えば、前者の例として、C組の小○は、行動では、いつもみんなの遊んでいるのを傍観しており、少しも人と一緒に遊ばなかったが、Sociometry では、star の一人に加えられるほどであった。(小○は第3回行動観察では leader の1人となった)、後者の例として A組

男子の繁○は、活潑に行動し、クラスのものから、チビとしてかわいがられ、その存在も目立っていたが、Sociometry では完全に孤立している。

4) 行動観察 Sociometry ともに孤立者であるものは、行動観察ではどの group にも属していないとか、又 group の周辺において自分は加わりたそうだが、一向 group のものから注意されずぽつねんとしているようなものがあり、Sociometry では毎回選択するものをかえているものがあった。そして選択するものは、いつもその頃の人気 star であるというものが多い。このように自己に応じたものを求めず、常に人気のある star を追うところに、孤立する原因の一つがあるようと思われる。

5) 行動観察 Sociometry とも男子よりも女子の方が group にわかるのが早かった。このため男子は Sociometry でもかなり変動が多く、行動観察と相違することも多かった。

### 3. 双生児が学級成員の半数をしめる場合の group の形成について

さきに調査考察した中学一年生の group 形成は、その中に若干の双生児が存在したが、その存在が group 形成に特別の影響を及ぼすということはみられなかった。それでこれを一応、一般的の中学一年生の group 形成の様相を示すものとして、さらに学級における双生児の存在の割合が多くなった場合にはどうであろうかということを考察しよう。

たまたま、昭和28年度から附属学校の方針として、双生児の入学者を多くすることになったので、観察の機会が得られることになったものである。また昭和28年度の双生児入学者は A組、B組、C組にいろいろなかたちで分けられたが昭和29年には、双生児の兄弟をすべてA組とB組に分けて、組を編成することになったので、そのような集団構成上の条件の相違した場合についての考察もなされることとなった。

これからは、もちろん、この研究のためにそうしたのではなく、附属学校の教育研究方針によるも

ので、行動研究としては、同一学級に兄弟がいる方が、観察あるいは比較に便利であるが、兄弟がそれぞれ別の学級に編入されているという条件においても、考慮すべき問題はあるわけであるので、行動観察と Sociometry はひきつづき同様な方法で行った。なお、この二つの方法による調査はこの研究のためのみでなく、附属学校における教育研究の基礎資料を提供するものとして、生

徒の行動的特徴、性格的特徴を知るために、昭和 31 年度にもひきつづき行っている。

ここでは、学級編成の条件を異にした昭和 28 年度と、昭和 29 年度との Sociometry と行動観察の group 形成上の問題の要点のみをまとめて示す。

昭和 28 年度及び昭和 29 年度入学の双生児の組編成は次のようである。

第 7 表

入学年度	組 人數 内訳	A	B	C	備 考
28	成 員	40 人	40 人	40	1. A 組は双生児が組全体の人数の半分あり、10組とも一対である。 2. B, C 組では双生児は全体の 3 分の 1 で、EZ の女子 1 組と、ZZ の女子 1 組は、B, C 組にわかかれている。
	一般児	20	30	30	
	双生児	20	10	10	
	双生児 内 訳	EZM 3 組 ZZM 1 組 UKM 1 組	F 3 組 F 1 組 PZ 1 組	EZM 1 組 F 1 組と 1 人 ZZM 1 組 F 1 人 PZ 1 組	
29	成 員	40	40	40	1. A, B 両組の約半数は双生児である。 2. ZZ の男女 1 組が A, B 両組に一対ではいっている外はすべてわかかれている。 3. C 組には双生児はない。
	一般児	19	19	40	
	双生児	21	21	0	
	双生児 内 訳	EZM 8 人 F 8 人 ZZM 1 人 F 1 組と 1 人 PZ 1 人	EZM 8 人 F 8 人 ZZM 1 組 M 1 人と F 1 人 PZ 1 人		

第 8 表

男 子

	28 年 入 学 児	29 年 入 学 児
group のわかれ 方	A 組、C 組では組の大多数が、ボールゲームを中心にして、一緒に行動する。 B 組ではピンポンをするものと、しないものに大体二分される。	A, B 組で集団形成がかなり異り、A 組は組全体が一つの大きな集団をなして一緒に行動するが、B 組は小集団にわかれ思い思に行動する。組全体が共通の遊びをすることがあるが、個々に平行してやっていることが多い。
group の 特 徴	A 組はソフトボールが、行動の中心になり、ゲームの性質上、アンパイラーをおき、統制のとれた行動をする。ボールをしない時には、各人各様にさわぎ、もっとも活潑な組である。 C 組はボールぶつけを中心に、組全体が行動する。 B 組はピンポンをしないものは、ただふざけて教室の中をかけまわるだけであり、ピンポンをするものもつねに member は変る。	A 組は運動場で相撲、ボールぶつけなどをを行い、男子全員が参加して活潑に遊ぶ。 B 組は戸外で遊ぶことは殆んどなく、五目ならべ、将棋、ピンポンなど個々別々に行う。しかし、組の雰囲気は非常に明朗で、それのものが勝手にとびまわっている。 この小集団は単なる集合体といった感じで、学習時の名簿順の結びつきが大きい。時々 A, B 両組で一緒になることもある。

leader	A組はアンパイアをし、成績体格のよいものが、みんなの信頼を得て、leaderとなっている。 B、C組は活潑に動きまわってみんなの注意をひくものが目立つ程度で、特定の leaderはみられない。	A組では、組全体をひっぱっていくような leaderはみられないが、組の全員で遊ぶのでこの中で活潑に遊ぶ体格の大きい2、3人のものが目立っている。 B組は2、3人のあつまりの中で、活潑なものがいても、leaderとして目立つものはいない。
孤 立 者	A、B、C三組とも組全体のものが、その子なりに他のものと一緒に行動しているので、孤立者は全然みられない。	A組は大きいgroupの中にすべてが含まれ、B組はあまりにも個々にわかれていますが、いずれにしても、groupが閉鎖的でないで、memberの移動も大きく、孤立者も自由にはいりこむ余地がある。
双生児の存在	A組では、組の半数が双生児であるため組全体の雰囲気も非常に家庭的で、お互に名前を呼び合い、チームを、兄、弟軍にわけたりする。男子の大多数が一つの遊びを円滑に行うことでも、双生児の存在が、大いに関係すると思う。 B、C組では双生児の存在は目立たず、又、特別に扱われることもない。	A、B両組とも双生児が組の半数をしめているので、双生児として特別に見られる事はない。女子と同様、文房具のかしかりをするものは2、3あるが、双生児同志の交流は少く、女子と比較すると、双生児の存在が、両組の交友に影響を与えることは少いようである。

第 9 表  
女 子

	28年入学児	29年入学児
group のわかれ方	A組は一つの大きなgroupにまとまって行動する。 B組は行動的に不活潑で、2、3人の人気のあるものまわりに集まる程度で、groupにまとまる以前の段階にある。 C組は大体、三つのgroupにわかれている。	男子と比べれば、A、B両組の間での集団形成の差は少いが、A組の方がいくらか固定的な集団形成のきざしがみえる。
group の特徴	A組はジャンケン遊びをして非常に活潑である。 B組は折紙、読書など各自別々に行い、机からはなれない。 C組は石けりと、かくれんぼをする子供っぽい二つのgroup、又この両方に加わらず読書をするgroupがある。	A、B組とも、少人数のまとまりは時間ごとに変ることがあり、やや固定化したものも、席の近いもの、又学習時のgroupといった結びつきが多い。 遊びらしい遊びは、両組とも行わない。
leader	A組は活潑に遊びgroupの中心となっているものが2、3人あり、これに加わらぬが、非常に成績のよいものが、尊敬を集めている。 B組では、いつも2、3人のものが、まわりによっている人気のあるものが、2人いるが、leaderとはいえない。 C組は、leaderは各groupとも割合はっきりしている。	leaderの存在は殆んど目立たず、比較的対等な成員の中で、積極的な性格をもったものが、まとめ役、成員と成員の媒介者となっている。
孤 立 者	A組では、遊びに加わらぬものが孤立者として目立ち、6人ぐらいいる、この中には他から無視されているものと、自らgroupに加わらず、孤立しているものがある。 B組では、groupにわかれていなかっためわからない。 C組、全員が、三つのgroupの中に含まれている。	男子と同様、groupのまとまり方がまだきわめて流動的であるので、孤立者として、目立つものは殆んどみられない。
双生児の存在	A組では男子と同様、組の半数をしめている双生児の存在は、この組に特別な雰囲気をつくっている。しかし双生児であるからといって特に扱われることはない。 B、C組では、双生児の存在は殆んど目立たない。	A、B両組とも双生児が半数をしめているので、両組間の交渉はきわめて多い。例えば遊びの流行にても、両組の双生児を媒介にして伝わる。又文房具のかしかりがさかんで、休み時間になるとお互に交換しあうので、一般児もこれにならい、両組間の交渉はきわめて多い。このようなことは男子より女子に多くみられる。

## I. 行動観察から

- (1) 双生児が学級成員の半数をしめていても既にみてきたような双生児の少い27年入学児のgroup形成と比較して、それほど異った様子はみとめられない。例えば、双生児同志が組んで、一般児と対抗するというようなことはみられない。
- (2) 双生児の存在がgroup形成に、或程度の影響を与えてているのは、28年入学のA組と29年入学のA, B組というように、組の成員の半数を双生児がしめている組であり、28年入学のB, C組のように、組の成員40名に対して、双生児がその中に10名いるという組では、その影響はあまりみとめられない。
- (3) 28年入学のA組は、組全体が一緒に行動し、非常にチームワークがとれている。また、組をわける場合、自然に、兄、弟でわかれたり、また、双生児二人ともが運動が得意であるような時、一般児の一人がそうであるよりも、二人であるということが目立って、自然にleader的位置におかれるというようなことがあり、組のgroup形成に双生児の存在がかなり影響している。
- (4) 29年入学児は、さきにのべたように、兄弟がA, B両組にわかつており、更に教室が隣り合っているため両組の間の交渉がはげしい。これは単に双生児ばかりでなく一般児にも影響している。他の学年では組が異なるものの間には交渉はあまりないが、この学年では、殆んど毎時間のようにいったり来たりしている。この傾向は特に女子に強い。これに反して双生児が一人もいないC組とは、教室もやや離れているためもあるが、殆んど交渉なく、C組のみで遊んでいる。

(5) 28, 29年入学児とも、一般児が双生児を特別に扱うということは少しもなく、従って双生児自身も双生児だからといって肩身のせまい思いをするようなこともなくきわめて、自然に行動している。

## II. Sociometryから

- (1) 行動観察と同様、双生児だけでえらびあうことは全体として少い。しかし二、三の双生児はいつも双生児のみでえらびあっているものもある。(第2章の5節に詳述)
- (2) 一般児も双生児だからといって、特別に選択することはない。

むしろ社会距離点について、一般児の平均と、双生児の平均とを比較してみると、28年入学のA, B, C組ともに、双生児の方が低い。

第10表 双生児と一般児の社会距離点  
平均値の比較(昭28年入学)

組	A		B		C	
	M	F	M	F	M	F
双生児	5.38	5.65	4.32	3.57	4.77	3.22
一般児	6.36	6.38	6.15	5.41	6.44	6.61

このようなことが現われる原因については、まだわからないが、Sociometryに示される社会距離点は学業成績と関連が高く、双生児の中には、成績のふるわないものがあるので、これが二人というために一そく目立つということもあるのではないかと思われる。また、双生児対偶者の社会距離点が、かなり似ているので、社会距離点の低い双生児が二、三組もあると全体の平均値にかなり影響するということも考えられる。

第11表 双生児の社会距離点(28年入学)

組		社会距離点		組		社会距離点		組		社会距離点	
A	B	総計	平均	A	B	総計	平均	A	B	総計	平均
伊 ○	A	44	5.5	中 ○	A	34	4.2	竹 ○	A	95	11.8
	B	34	4.2		B	34	4.2		B	55	6.8

M	加○	A B	44 43	5.5 5.3	清○	A B	40 34	5.0 4.2	館○	A B	4 15	0.5 1.8
	内○	A B	31 59	3.8 7.3	加○	B	21	2.6	手○	A	22	2.7
	永○	A B	43 40	5.3 5.0								
	長○	A B	42 51	5.2 6.3								
F	折○	A B	82 102	10.2 12.7	青○	B	16	2.0	青○	A	30	3.7
	佐○	A B	24 57	3.0 7.1	鈴○	A	15	1.8	鈴○	B	44	5.5
	橋○	A B	22 42	1.7 5.2	石○	A B	19 38	2.3 4.7	内○	A B	9 8	1.1 1.0
	八○	A B	57 69	7.1 8.6	加○	A	55	6.8	手○	B	38	4.7
	平○	A B	6 1	0.7 0.1								

(3) 双生児対偶者の社会距離点が大体同じもの  
が多いことから、一般児が双生児をえらぶ場合

に、二人と一緒にえらぶかどうについてみると、第12表に示すとおりである。

第 12 表

入 学 度	卵 性	氏 名	えらばれた 総 数	一 般 児 が 二 人 を 一 緒 に え ら ぶ (一 順 位 に )	双 生 児 が 二 人 を 一 緒 に え ら ぶ (二 人 を え ら ぶ)
27 *(12回)	EZ (M)	吉○	A B	37 34	23 (17)
EZ (M)	EZ (F)	浅○	A B	34 30	15 (2)
		加○	A B	25 21	1
		内○	A B	15 28	0
		永○	A B	18 24	6
		中○	A B	26 24	17 (11)
		竹○	A B	49 34	18 (2)
		館○	A B	2 5	0
		折○	A B	43 47	13
		八○	A B	28 35	6
		橋○	A B	12 22	0
28 *(8回)	EZ (F)	石○	A B	13 18	6 (4)
		内○	A B	4 4	1

ZZ (M)	長○	A B	22 28	3 (3)	5 (1)
	溝○	A B	17 20	8 (1)	1
ZZ (F)	佐○	A B	15 17	9	1
	伊○	A B	18 21	1	12
UK (M)	平○	A B	2 1	0	0
	ZZ (M)	A B	5 6	3 (2)	0
29 *(2回)	ZZ (F)	A B	6 3	1 (1)	2

※は今までに行つた Sociometry の回数

この Sociometry では三人書かせ、順位をつけさせるが、この三人の中に双生児の一対がいれられる場合が大分ある。又なかには、一つの順位に、××兄弟二人と書いて、全く二人を区別していないものさえある。例えば、吉○兄弟についてみると 12 回にわたって行われた Sociometry の中で、A 児は 37、B 児は 34 えらばれているが、このうち、一般児から二人一緒にえらばれたのが 23、他の双生児が二人と一緒にえらんだのが 7 で、合計 30 も二人は一緒にえらばれている。又一つの順位に二人の区別なくえらばれたのが、一般児、双生児合わせて 21 もある。これは一番顕著な例であるが、その他にもえらばれた総数の半数以上が二人と一緒にえらばれているものをあげると、浅○、加○、中○、竹○、八○、溝○、佐○、伊○、数は少いが、安○、藤○など、吉○を加えて 11 組もあ

る。

このうち、加○、伊○兄弟、又八○姉妹は、一般児からは二人一緒にえらばれることは少いが、他の双生児からいつも一緒にえらばれている。

ここでは、双生児が学級成員の半数をしめている場合、group の形成にどのような影響を与えるかを主としてみてきたが、双生児の少い 27 年と較べて、特別な違いはなく、28 年入学の A 組のように家庭的な雰囲気を作り、チームワークがしたいとか、29 年入学の A、B 組のように両組間の交流が多いという程度であった。Sociometry においても同様で、双生児だからといって特に人気があるということはないが、双生児を二人一緒にえらぶ傾向はかなりあるようである。全体としてみると、双生児が学級成員の半数をしめていても、group 形成には何ら影響はみとめられない。

## 第2章 中学一年の学級集団における双生児の行動

さきにみてきたような中学一年生という学級集団の中で、双生児はどのような行動をするだろうかということを観察結果からまとめてみる。

附属学校では多くの双生児をいれているということは、入学を志願するほどの者にはよく知られていることであるので、新入学の生徒も双生児を特に珍しがったりしないし、たとえ珍しがってもそれは入学当座のことであり、しかも、28, 29年のように組の半分が双生児で占められるようになると、特別な様子は殆んどみられなくなった。

小学校時代では、双生児は一校にせいぜい一組か二組であるので、珍しがれたり、からかわれたりするものも多いようである。このことは、入学時の面接の際、本人も親も双生児が多くて、いじめられない学校にいきたいと言い、特に親達の多くは、双生児を生んだことに対して、非常にひけめを感じていたといい、こんなに大勢双生児がいると思うと、心強く思うといつたりしていた。又、文章完成テスト(SCT)によって“私たちが小学校にいたとき……”という句を与え、そのあとをつづけて書かせると、双生児といってからかわれた、いじめられたという答が圧倒的に多かった。このような小学校時代をすごした双生児にとって、附属学校にはいったことは、なにか非常にのびのびした気分になり、又同じような仲間を得たという喜びを感じていると考えられる。少くとも、双生児であることをひけめに感ずることは非常に軽減したと思われる。ある女子双生児の親は、今まで双生児であるといっていじめられたためか、意気地がなく、なにかおどおどしていたが、この頃とても明るくなつて、今までしなかった学校の話など、二人で楽しそうに話してくれると言っていた。ともかくも附属学校に入学した双生児はこうした雰囲気で、双生児であるということにこだわりなく、非常に自由に行動しているものと思われる。

そこで、このようなものたちが、中学一年生という学級集団において、どのような行動をするか

ということを、いろいろな面からみてみたい。

前にも記したが、ここで再び昭和27, 28, 29年の三ヶ年間に附属中学の一年に入学したものの組分けを示すと次の表の通りである。

第 13 表

性 組	卵性 E Z		Z Z		P Z	卵性 不明 M F	計
	M	F	M	F			
27 同	2	1	0	0	0	/	3
	0	1	1	1	2	/	5
28 同	6	5	2	1	2	1 1	18
	0	1	0	1	0	0 0	2
29 同	0	0	1	1	0	/	2
	8	8	1	1	1	/	19

(数字は双生児組数)

このように各年度によって、組分けのしかたが異なるのは、それぞれの年の指導計画、研究目的などの変化によるものである。

### 1. 同じ組にいる場合と異なる組にいる場合での双生児同志のむすびつき

学校生活では組という単位が、個人の行動を大きく制約する。従って一对の双生児のむすびつきも、同じ組にいるか、異なる組にいるかということによって、大きく左右されると思われる所以、これについて観察した結果を述べる。

#### A. 異なる組にいる場合での双生児のむすびつき

二人が同じ組にいる場合では、大多数の双生児は一对で同じ集団に属しているが、それぞれ組が異なる場合では、二人のむすびつきは種々の外部的条件によって、左右される。

27年には、A, B, C 三つの組の教室が、A組の教室は三階の南のはしに、B組の教室は二階の

北のはし、C組の教室は一階の北のはしというように、各教室が離ればなれになっており、また組の異なる双生児は、もっとも離れているA組とC組とにわけられていたためか、学校生活での二人の間の交渉は殆んど皆無といってよいほどであった。しかしながら、組の異なる5組の双生児の中、女子の2組の双生児は、登校、下校時には大低一緒であった。

28年には、三つの組の教室が、同じ北のはしに、一、二、三階と縦に並んでおり、この年の双生児は大半同じ組におり、組の異なるものは女子双生児二組であったためか、27年度に較べれば、かなり二人の交渉がみられた。たとえば、お互に相手の組の友達と一緒に遊んだり、本、文房具等をかしきりすることもあった。

29年には、二卵性の男、女一組ずつを除いた19組は、すべてA組、B組にわけられ、この二つの教室は、同じ一階で隣り合っているため、組が異っていても、27、28年度にはみられなかつたりいろいろの結びつきかたがみられ、その中には、お互の結びつきが非常に密なものもあった。

この相互のむすびつきの度合を、(1)一日中殆んど交渉がないもの、(2)もののかしきりなどをしてやや交渉があるもの、(3)休み時間毎に一目会わぬと気がすまないというように非常に密な交渉があるものの三つの群にわけて、19組についてみると次のようになる。

第 14 表

	E Z		Z Z		P Z	計
	M(8)	F(8)	M(1)	F(1)	(1)	
無 交 渉	5	0	1	1	1	8
やや交渉 あり	1	4	0	0	0	5
密	2	4	0	0	0	6

(数字は双生児組数)

この表について少しく説明を加えると

- 1) ZZ, PZはわずか3組しかいないが、3組とも、学校生活では全然交渉がみられず、さらに登校、下校も全く別であった。
- 2) EZにおいては、はっきりした男女差がみられた。即ち男子の多くは、殆んど交渉がないの

に対して、女子ではお互に全く交渉のないものは一組もなく、特に密な結びつきを示すものが4組もみられた。

特に密な結びつきがみられた男子2組、女子4組について、その交際の具体的な場面を二、三あげてみよう。

男子2組の中の1組は、他と異り、他のものは一緒に話し合う、のぞきにいくといった、どちらかといえば静的な交渉であるが、この1組は、休憩時間になるとみんなが大勢いるなかで、あたりかまわずに“ター坊”“ソーフ”と呼び合ったり、目くばせしたり、合図をかわしたり、さらにかなりふざけ半分ではあるが、何かものをとりっこして、追いかけまわり、廊下で組みあったりする。

これに対して、もっとも密であるとみられる女子の1組は、休憩時間毎に必ず一度はいずれからともなく、相手の教室をのぞきにいき、相手がいると、決して戸口から呼び出したりせず、教室のなかにはいって、なにかしらちよっと言葉をかわす。これは本当に二言三言であり、ごく小声なので観察者にも聞きとれぬほどであるが、時にはトイレットにいこうと誘ったり、ある時には、言葉さえもまじえず、顔を合わし、相手の存在を確認すると満足したように別れてしまうこともある。

たまたま合併授業になると、自分のすぐ隣に坐らせようとする。そして面白いことには、休み時間中決してずっと一緒にいるのではなく、一目合うだけで離れてしまい、休み時間が短く僅か一、二分の時でも必ずのぞきにくるのである。

さらに、27、28年度にはみられなかつたことが、このように双生児が半分ずついるA、B両組の交流が一般児にも影響し、特に女子においてはその傾向がみられ、遊びにも似たようなものをやることがある。そしてこの遊びの伝わる経路に双生児が媒介となっていることも観察された。

#### B. 同じ組にいる場合での双生児の むすびつき

二人とも同じ組にいる場合にはどのような結びつきを示すかを、(1)いつも一緒にいる、(2)お互の存在に特別な関心を示さない、(3)離れているというようなわくを作つて観察したものを見ると次表のようになつた。

第 15 表

卵性 性	E								Z					ZZ					卵性 不明		PZ				
	M (N=8)				F (N=6)				M (N=3)			F (N=2)		M	F	伊	平	加	手	星					
姓 名	繁○	吉○	加○	永○	内○	中○	竹○	館○	浅○	折○	八○	橋○	石○	内○	長○	溝○	安○	佐○	藤○	伊○	平○	加○	手○	星○	
入 学 年 度	27	27	28	28	28	28	28	28	27	28	28	28	28	28	28	28	29	28	28	28	28	28	27		
第 1 日	×	○	○	○	○	○	○	○	○	×	○	○	○	×	×	○	○	×	○	○	○	○	×	×	×
2	○	○	○	○	○	○	○	○	×	×	○	○	○	○	○	○	○	×	○	○	○	○	×	×	×
3	○	○	○	○	○	○	○	○	×	×	欠○	×	×	○	○	○	○	×	○	○	○	○	○	×	×
4	○	○	○	○	○	○	○	○	×	欠	欠○	○	×	○	○	○	○	×	○	○	○	○	×	○	×
評 定	○	○	○	○	○	○	○	○	×	×	○	○	○	×	○	○	○	×	○	○	○	○	×	×	×

## (表の説明)

○EZは昭和29年度入学のものはすべて異なる組に編入されたので、27年と28年度のもの14組である。それにZZ5組、PZ3組、卵性不明が2組である。

○観察は3ヶ年ともに、4日間を一期間として行われ、6月下旬から7月上旬までの夏休み前に行われたものである。

○ ◎……いつも一緒にいる。

○……お互の存在に特別な関心を示さない。

×……離れている。

欠……一対の片方が欠席のため、二人の関係がみられなかったもの。

○評定……4日間の観察結果を通じて、大体の傾向として評定された。

この表からみると、

のものが学級集団に参加する様相をみよう。

(1) EZの男子はそのほとんどがいつも一緒にいることになっており、EZの女子は一緒にいないものの方が多い。これは組の異なる場合のEZの男女の関係と反対になっている。こういう結果が示されたのは、第1章の中学生一年生の集団形成でみたように、男女は組全部が参加するような大きな集団をなして遊び、女子は小集団にわかれることが多いということからではないだろうか。ZZの場合にもそうした傾向がありそうに思われる。

(2) 上記のようなことで、卵性による差異は明らかではないが、PZは3組とも、はなれていた。

次に、このような三つのむすびつきの型について、それぞれ代表的なケースをあげ、またそれら

## 2. いつも一緒にいる双生児

“いつも一緒にいる”というむすびつきを示す双生児でも、他の集団とは全く離れて二人だけでむすびついた小集団を作る双生児と、大勢の集団に二人とも参加し、そのなかで二人はいつも一緒にいる双生児と二通りあるように思われる。

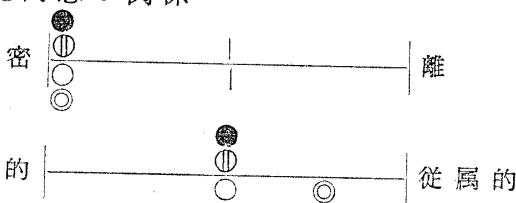
この二通りの代表的な例をあげるならば、双生児同志だけのむすびつきとして、吉○兄弟を、又大きい集団内に同時に参加しているものとして、加○兄弟をあげてみたいと思う。

吉○兄弟は、27年に入学したもので、4月に8日、7月に4日、3月に4日間の三回の行動観察を行っており、加○兄弟は28年に入学し、7月に4日間の観察を行っている。

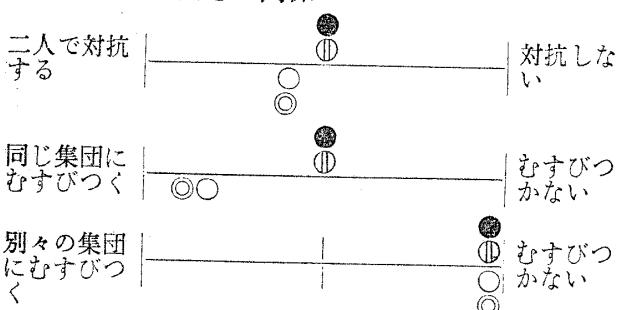
### 吉 ○ 兄 弟 (EZ)

第一回観察(昭和27年  
4月10, 11, 12, 14日……前期  
15, 16, 18, 19日……後期)

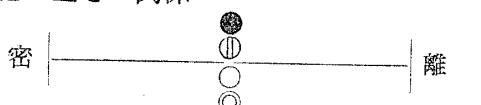
## I 同志の関係



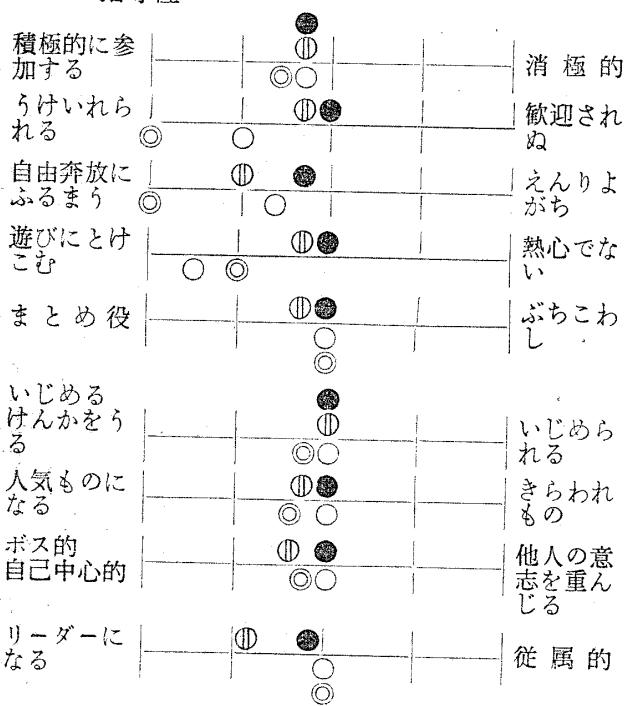
## II 双と集団との関係



### III 他の図との関係



#### IV 集団における参加度、安定性、協調性、指導性



- ☺ 同胞双生児  
 网 同胞でない双生児  
 ● A児(兄)前期  
 ○ 〃 後期  
 ○ B児(弟)前期  
 ○ 〃 後期

観察結果を図にあらわしたものでみると左のようになる。

## I 対偶者間の関係

### (1) お互いの関係

2人の間柄は非常に親密である。

いつもお互の存在を気にし、2人一緒に行動する。

## (2) 兄弟的關係

A児(兄)の方は、観察期間の後半においては、B児(弟)に対して、やや命令的なところがみられたが、反面、兄らしく世話をやいたり、他の人にに対しては、常に弟をかばおうとする兄らしさが見られたB児の方は兄を兄として取り扱い、従順であるので、2人の間には支配、服従から生じるトラブルは少しもみられない。2人とも兄らしく、又弟らしくするのをあたりまえのように、極めて自然に行動している。

## II 2人と集團との関係

2人だけで結合し、他のものがいかにあろうとも平気で、級の大きな集団から孤立している。お互に、他のものから、相手をかばおうとするところがあり、ごく軽い意味での排他的なところがみられた。

### III 各児と集団との関係

組の殆んど全部の男子が、野球を中心に一つの大集団をなして行動しているのに反して、彼等2人だけはこれから全く離れている。

彼等にとっては、お互の存在がこの上もないよいお友達であるらしい。2人だけで遊ぶことで充分満足している。

自分達以外の集団に対しては、徹底的に無関心であり、自分達が級の集団から孤立していることを何とも考えていないらしい。

級友に対する態度は、2人とも、おどおどしたところはなく、活潑であった。

A児は割に自己中心的で、他人の気持を考えて自分の行動を制限するようなことはなく、誰に対しても、リーダー的であった。

B児はA児と異って指導的なところはみられず、級の友達とも、同等に交わろうとする傾向が強く、自己中心性も兄より少いようである。

吉○兄弟に対する級友の態度は2人の間がある

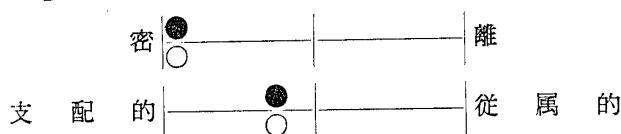
り密であるため、級友にはちょっとこの間に這入っていく余地がないように感じさせるらしい。よくこの2人が遊んでいるのを傍観しているものがある。又2人と一緒に遊んでも、2人だけの世界があり、戸惑いしたような感じを持たせるらしい。なにか閉め出されたように、ぼんやりしていることがある。

#### IV 同胞でない双生児との関係

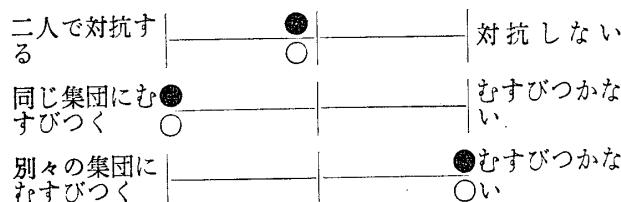
同じ組に、磯○、星○という男子の双生児が2人もいるが、全く交渉なし。

### 第2回 観 察 (昭和27年 7月4,7,8,9日)

#### I ◎同志の関係



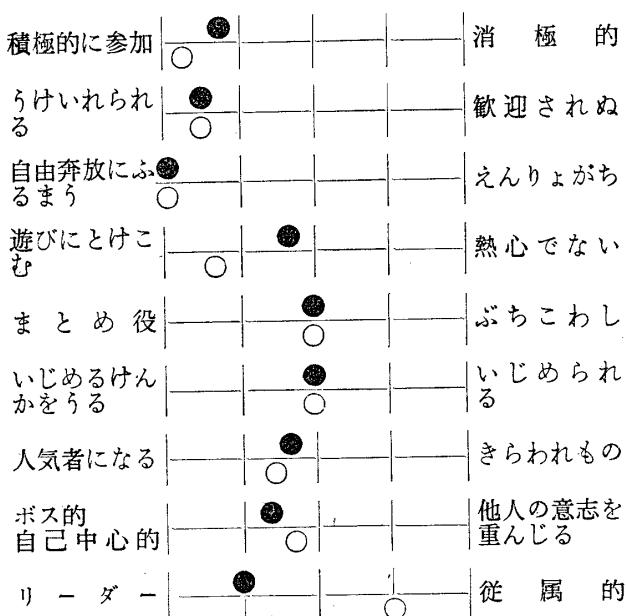
#### II ◎と集団との関係



#### III 他の団との関係



#### IV 集団における参加度、安定性、協調性、指導性



#### I 対偶者間の関係

2人の間は依然として、密である。

第1回の観察の後期にみえてきた2人の間の兄らしさ、弟らしさは一段と顕著になつてきた。

A児はいつもB児のことを気にし、B児がなにかよいことをすると、他人にもこれを認めてもらおうと大声でほめたり、なにかと気をくばっている。これは兄として責任意識などからではなく、ただ心から弟を愛しているらしい。従って現在では、A児の関心は、他人に対するよりもB児に向けられ、一緒に遊んでいて自分はあまり遊ばず、B児が遊んでいるのを眺めていることもあった。

A児ほど、相手の存在を気にせず、級友とも、A児より交渉が多い。席の近くの女子ともよく話し、A児と比べて、全体にのびのびして、活潑である。

#### II 2人と集団との関係

第1回観察では、2人だけで遊ぶことが多かったが、今回はこれをとりまくものが3,4人いつもいるようになった。

前回の時のように、他の人にくつてかかるような態度がなくなり、排他的であったところは見られなくなった。

#### III 各児と集団との関係

吉○兄弟を中心に4,5人で小さい集団をなしつつあるが、級の中心をなす野球を中心とした大きな集団とは全く無関係で、2人だけ孤立した感がある。

前回よりも相手以外のものと遊ぶことが多いが、自分達から積極的に友達を求めるることは少い。遊びたければ遊ぶし、気が向かなければ2人でいる。寄ってくれれば話すし、来なければ、来ないで良いという調子である。

A児は比較的リーダーらしくふるまう。B児は兄のようにリーダーにはならないが、自由奔放で活潑にふるまつている。

2人に対する級友の態度は2人が相變らず密であるため、いつも2人を一緒に扱っている。(Sociometryの時など彼等を選んでいるものは、2人を区別せず一緒に選んでいるものが多い)

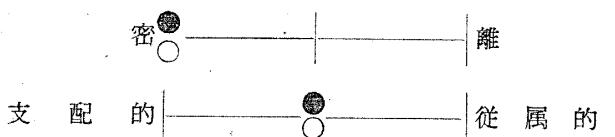
2人の間に這に入るものも、相變らず一心同体であるため、まごつかされることが多い。・

#### IV 同胞でない双生児との関係

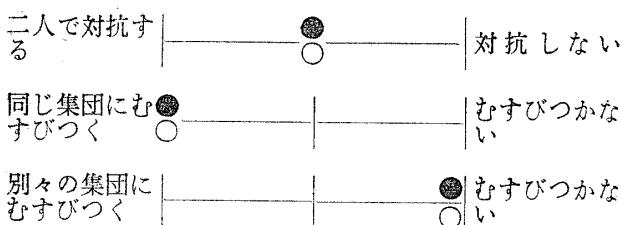
前回と同じく全然交渉がない。

## 第3回 観 察 (昭和28年3月2,3,4,5日)

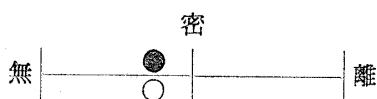
## I 双同志の関係



## II 双と集団との関係



### III 他の図との関係



#### IV 集団における参加度, 安定性, 協調性, 指導性



## I 対偶者間の関係

相変らず二人の間は親密である。

お互の存在を気にするのは、前回の観察と同様で、どちらが、どこかに行く時には、必ず相手に行ってよいかどうか聞いてから行動する。

前回の観察と同様相手の存在を気にするのはA児の方が強い。B児がノートをうつしたりしていると、いろいろの人から聞いてきて手伝ってやったり、なにかB児が用で先生のところにいく時にはついていってやる。まめに世話をやく兄らしい点が目立つ。

## II 2人と集団との関係

第二回観察の時と同様、二人を中心としたとりまき集団に属している。以前よりも、2人きりでいることが少なくなった。これは2人の親密度がうすらいだのではなく、入学後1年近くなり、級友が2人の間柄になれ、近寄りやすくなつたのと、彼等も2人で他に対抗することなく、ふざけるような余裕を持ってきたためではないかと思う。

### III 各児と集団との関係

野球を中心とした集団にも、又あまりまとまつた遊びをしない久○、矢○の集団にも属さず、所属不定というものがもっとも適切であるが、後者の大人しいものの集団の中から、吉○兄弟の集団に近付いてくるものもあり、やや後者の集団とかかわりがある。

従来の様に、誰に対しても命令口調でものいうことがなくなり、leadershipは目立たなくなつたが、組のものが、彼等の特殊性を認めており、彼等が積極的にleadershipを示さなくても、2人を中心にして動いていることが多い。第2回観察では、A児はB児よりも不活潑で、活潑な弟の姿を見て喜んでいたようであるが、今はむしろ逆で自分からふざけ、取っ組み合いをするなど、B児よりもかえって活潑である。A児と同様、自己主張をすることは少いが、子供らしく、また茶目氣があるので、みんなから好感を持たれているようである。前回の観察にくらべると、やや不活潑になったようであるが、特に目立つほどではない。級友の態度は2人の間に這入っても、2人が余り親密であるために、戸惑いするようなことは

なくなり、2人と級友との間が、非常にスムースになったようである。2人を2人のままで、可愛っている感がある。

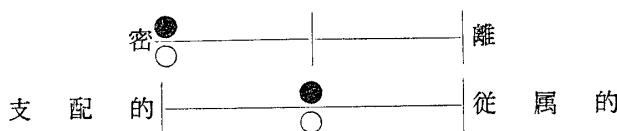
#### IV 同胞でない双生児との関係

前回まで全く交渉のなかった磯○岡と一緒に遊ぶことが多い。磯○の方から働きかけてくる。星○岡とは全く関係なし。

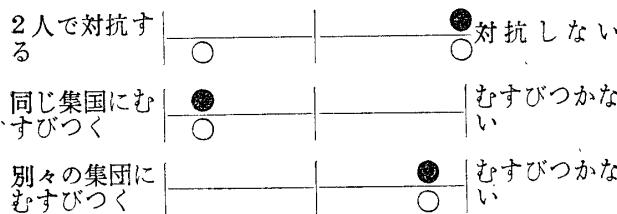
加 ○ 兄 弟 (EZ)

## 第1回 観 察 (昭和28年6月) (29,30,7月12日)

## I 双 同志の関係



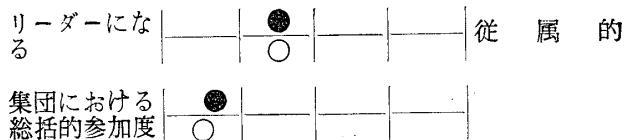
## II 双と集団との関係



### III 他の図との関係



## IV 集団における参加度、安定性、協調性、指導性



## I 対偶者間の関係

### (1) お互いの関係

体格も小さく、動作もちょこちょこして、全体にやさしく女性的な感じがするので、全く中学生とは思われないような可愛らしさがある。この2人がもっれるように肩を組み、犬の子のようにくみ合って、戯れ合っていると全くお互に離すことのできない間柄であることが感じられる。28年度にはいった双生児20組の中でも一番仲が良いのではないかと思われる。しかし吉〇兄弟のように、2人だけで世界をつくり、それがあまりに親密なために、他人の介入する余地もないというようなのとは少し異り、今年度は一緒に入学した双生児の数が多くためもあるが、友達ともよく交り、2人のみで孤立しているようなことはない。例えば、一方が友達にとっ組まれて負けそうになっていても、別に兄弟に加勢するということではなく、そばでやにや笑っている。遊びには遊びとして、お互に自由にとけこんでいる。このように遊び自体ではいつもぴったりくつついでいるわけではないが、昼休みも終り、教室に帰る時など、2人で追いかけっこをしたり、取組み合いをしたりして、2人で実に楽しそうにもつれ合っていることが度々みられた。

## (2) 兄弟的關係

一方が兄であり、一方が弟であるといった行動の差異は、殆んどといってよい程見受けられず、2人はよき遊び友達、仲良しといった感じで、時には一心同体の仲であるという感じをうけた。

強いてみれば、leaderはむしろB児の方であり、とくに「あいなど」B児の方が積極的にとびかかり、腕力も強い。しかし後からA児を倒しながらも、全部まで倒さず、途中で起きあがらせてやるといった思いやりの細いところもみられた。

## II. 2人と集団との関係

2人で組んで、他のものに対抗したり、又2人だけで小集団を作つたりせず、大抵2人で同じ集団に参加している。

### III 各児と集団との関係

この組は同学年の3つの組の中でもっとも活潑な組で、ひる休みは大低組全体の男子が集ってソフトボールをするが、それには2人とも多くの場合参加している。

しかし時たま、みんながソフトボールをしない時には、いくつかの小さい集団にわかれ、三々五々行動するが、この時には、野球や、ソフトボールの時などの leader' 格のものの集団とはあまり関係なく、むしろそういうものに加わらないような長○、伊○という他の双生児の集団と、接近していることが多い。

伊○、長○などの集団では、目立つた leader はない。伊○兄弟の兄がやや leader 格。温和で女性的な外見から想像されるより、はるかに活潑的で、2人とも、集団内でよき member である。

ソフトボールの集団に加わっている時には、A 児の方が、集団に対する親近度が多いようで、やや、人気もあり、キヤッチャーになったこともあったが、B 児の方は目立たない。

しかし行動の活潑さは殆んど同じであり、2人の間では、B 児の方が積極的であり、lead している。

2 人に対する級友の態度は、彼等がちょこちょとして、小さく可愛いいので、背の高い級友などからかわいがられている。

### IV 同胞でない双生児との関係

上述のように伊○、長○兄弟と親しい。いつも一緒にいる双生児の特色についてまとめてみると次のようにいえる。

#### 集団への参加

上述の加○兄弟のケースにもみられるように、いつも一緒にいる双生児であるからといって、必ずしも集団の参加にお互の存在が邪魔であるとは限らない。2人で同一の集団に参加し、その中で、お互に自由に行動する場合も多い。

しかし、このような場合でも、この“いつも一緒にいる”双生児は、お互に相手の存在を気にすることは、他のむすびつきを示す双生児に比較して、非常に多く、どこかにいく時には必ず相手にいつていいかどうか聞いてから行動したり、また

女子双生児に多くみられることであるが、1人が toilet にいきたくなると、相手も誘っていったりするという行動などは、全く個々別々に行動する双生児とくらべれば、集団に参加する場合に、かなりの妨げになるのではないかと考えられる。いつも一緒に2人だけでいるということが徹底した吉○兄弟の場合では、集団への参加には全く無関心となる。これは2人の関心がお互の存在にばかり向けられ、2人だけで遊ぶことが、2人にとてこの上ないことであるので、集団からは全く孤立している。しかし吉○兄弟のように典型的なものはごく稀で、多くの場合、加○兄弟のように、同一の集団に参加しつつ休み時間が終って、教室に這入る時とか、ごく短い休み時間などに、2人だけで小犬のように戯れ合うといった2人だけの瞬時的な小集団をつくる場合がみられる。

#### 集団との対抗関係

全体として、2人で組んで、他の人また他の集団にむかっていくことは少い。しかし他のむすびつきを示すものでは、このようなことは殆んど皆無といつてもよいのとくらべると、ややそのような傾向がみられるといってよいだろう。第16表は、いつも一緒にいる双生児10組について、4日間の観察の中で、そのような行動が、僅かでもみられるものを○、全くみられぬものを×で示したものである。

第 16 表

観察	いつも一緒にいる双生児									
	E Z M			EZM		ZZM				
	吉○	加○	永○	内○	中○	竹○	館○	橋○	長○	溝○
第1日	1 X	2 X	3 X	○	○	X	X	X	X	X
2	○	○	X	X	X	X	○	X	X	○
3	○	X	X	X	X	X	○	X	X	X
4	○	X	X	X	X	X	X	X	X	○

このような傾向が非常に顕著なものは、吉○兄弟で、特に入学当初の第1回の観察では、お互に他のものから、相手をかばおうとする場面が、度々

観察された。例えば、冗談半分で、他の人と双生児の1人とちょっとした取組み合いが始まり、弟の方が負けそうになると、兄が加勢に出てきたり、また純粋な対抗関係ではないが、4, 5人のものと一緒に、石けりのようなことをし、弟が非常によく出来て、それを他のものが気付かないと、兄が、ほら○○ちゃんは上手だと大声で言ってみんなの注意をひいたりした。しかし、このような傾向は、入学後、日がたつにつれて目立たなくなつた。

### 2人の関係

このようなむすびつきを示す双生児はお互の存在について、いつもなんらかの関心をもっている。仲が良く、2人ともお互に助け合おうとする協力的な態度で、自分の存在を相手の存在よりも、高く評価してもらおうというような自己意識、又競争意識の強くあらわれた場面は、殆んど観察されなかった。いつも2人としてみられることを、あたりまえとし、2人として行動することを望んでいることさえあった。又これは実験的にしらべたわけではなく、観察からの推測にとどまるが、2人の間での意志の疎通も、他のむすびつきを示す双生児と比べて、よいのではないかと思われる。例えば、吉○兄弟の場合、2人で遊んでいるところに他のものがはいっても、遊びのルールなどが2人の間で自然に決ってしまっているので他のものは、ちょっと戸惑いした形になるといったこともみられた。(29年度の研究によって、この事実は確証された)

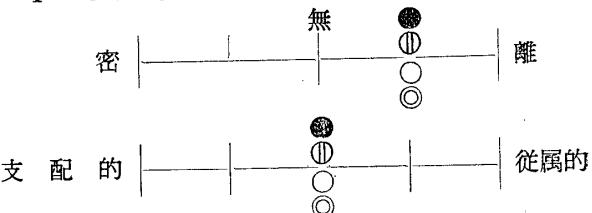
### 3. お互の存在に特別な関心を示さない双生児

いつも一緒にいる双生児のように、非常に親密なむすびつきを示すものでもなく、又ことさら離れているのでもない、時には一緒になり、相手に対する思いやりの情もみられるかと思えば、又ごく位置的に近いところにいても、話そうともしないといった、間がらの双生児について、昭和27年入学の繁○兄弟、昭和28年入学の平○姉妹についてみてみる。

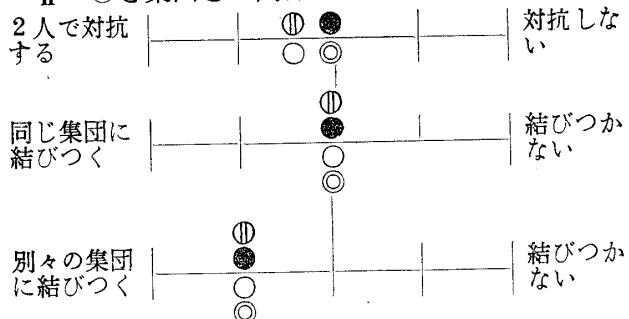
### 繁 ○ 兄 弟 (EZ)

第1回観察 (昭和27年  
4月 10, 11, 14 ……前半  
15, 16, 18, 19 ……後半)

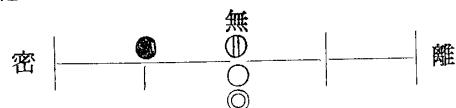
#### I 同志の関係



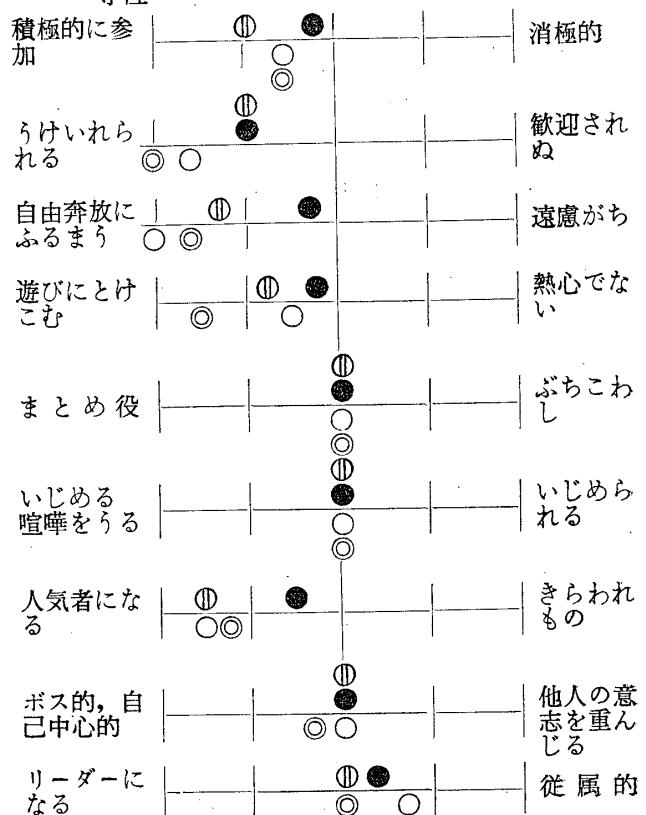
#### II ②と集団との関係



#### III 他の団との関係



#### IV 集団における参加度、安定性、協調性、指導性



## I 対偶者間の関係

同じ組にいるが、大抵別々に行動する。

A児は兄としての支配的な態度はみられないが、月謝をおさめたり、書類を出したりするような学校の事務的な用事は、どんどん自分だけですし、なにくれと兄としての世話ををする。

B児は完全に兄にたよりきっている。

## II 2人と集団との関係

それぞれ別々に行動するが、級全体がまだ集団としてわかれていないので、浅○姉妹のように別別の集団に属するのではなくいろいろの友達とつきあっている。A児は全く特定の友達のないB児に比べれば、関、小○などと割合に親しい。なかばふざけていたのであろうが、ハム双生児などといわれると、2人で組んで級友にぶつかっていった。

## III 各児と集団との関係

組全体がまだ集団にわかれていないのでわからなかった。

A児は入学当初では、机を囲んで雑談をすることが多かったが、彼は決して話の主体とならず、大抵聞き手であった。入学後、4,5日目には、やや活潑に追いかけっこやふざけっこをしていったが、B児に比べれば不活潑であり、1人で何かしていることの方が多い。

B児はA児よりもいつも活潑に動きまわっているが、幼児がただ目的もなく、自分勝手に手足を動かしているようで、少しもまとまった行動を示さない。従って遊んでいる集団に参加しても、その中で勝手にひとりで遊んでいることが多い。

級友はこの繁○兄弟が体も小さく、しかし双生児であるので特別に扱っている。それは、同格というよりも目下の子供に対するように、なでまわし、玩具をしている。これに対して、A児はこれに甘んじることをきらい、茶目でひょうきんではあるが、自己を持っており、人から嘲けられないように努力しようとしている。しかし双生児であることに劣等感を持っているのではなく、むしろ双生児であることは自分達だけの特権のように、兄だ弟だといって人をまごつかせて喜んでいる。B児はただひたすらに嬉しそうに、ゴムまりのように、級友の手から手へと移っていく。

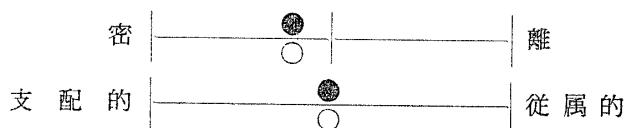
このA組では、男子全体が組んで、双生児で觀察されるのを妨げようとしたが、B児は、このため自分が組のものの行動の中心になっているかのようにいかにも得意そうであった。

## IV 同胞でない双生児との関係

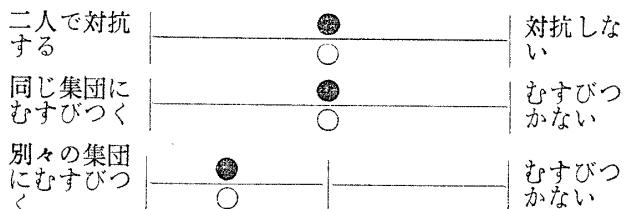
同じ組にいる男子双生児はZ Zの野○1人であるが、A児は勉強でわからないことなどいつも教えてもらい、なにかとかばわれていた。B児は勉強を教えてもらうことは少く、弱いものとしてかわいがられることが多い。女子の双生児とは、殆んど交渉がない。

### 第二回 観察（昭和27年7月4,7,8,9日）

#### I ④同志の関係



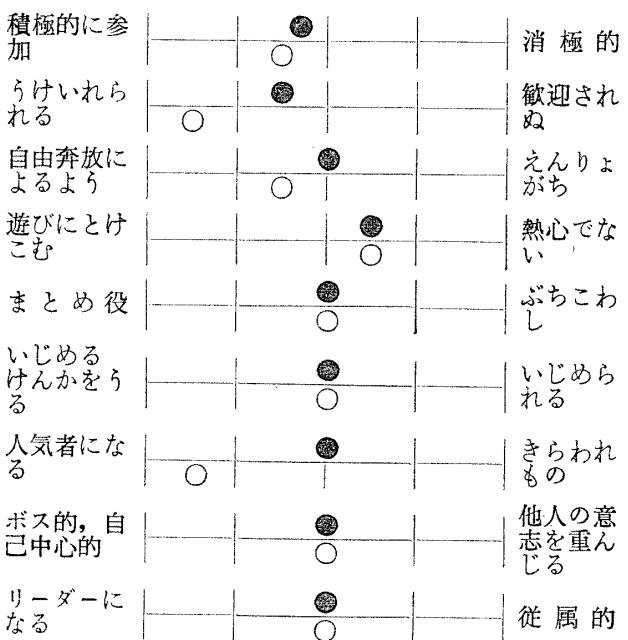
#### II ④と集団との関係



#### III 他の団との関係



#### IV 集団における参加度、安定性、協調性、指導性



## I 対偶者間の関係

第1回の観察の時よりも一緒にになる機会がやや多いが、大体は別々に行動している；属する集団も特にはっきりしていないが、異なるようである。

このように一緒になる機会が多くみられたのは、A児が兄らしく、弟の面倒をみるとが多くなったためである。例えば、当番の時などB児があたっていると手伝ってやり、またラケットなしでピンポンをしていると、どこからか探ってきてやる。

B児はA児の世話を平気でうけており、A児に比べると相手の存在を思う気持も少いように思われる。しかしA児に対しては一目おいており、「兄貴の方が出来るんだよ」といったこともある。

呼び方も名前を呼ぶこともあるが「兄ちゃん」と呼ぶこともある。

## II 2人と集団との関係

特にはっきりしていないが、別々の集団に属することが多い。

第1回の観察の時のように、2人で組んで、他のものに向っていくようなことはみられなかった。

## III 各児と集団との関係

A児は野○〔国〕小○、織○などの小人数の集団に属しているが、特に密ではなく、比較的誰とでもつきあう。

B児は江○を中心とした大人数の集団に属し、ピンポンをよくする。なかなか上手で、時には集団から離れて上級生とやることもある。

A児は第1回観察の時よりも活潑さを失い、主に図書館に通ったり、B児が遊んでいるのを傍観したりしている。

B児は底なしに明るく、ちょこちょこ動きまわり、A児の静止的態度にくらべて、かなり差がある。

一つの遊びを長く継続せず、時々あきると、集団から勝手にはなれ、1人でふらふらと誰とでも遊ぶ。女子とでも非常に面白そうに遊ぶ。（男子が女子と遊ぶのは、このB児1人である。）

彼等に対する級友の態度をみると、A児は第1回観察の時にくらべ、級友の双生児に対する関心

がうすらいだためか、あまり人気はなくなり、その反面、以前はただかわいがられていたのが、同格の人間として、対等につきあっている。

B児はA児よりも人気があり、ピンポンがうまいせいか、上級生からもチビチビといってかわいがられている。前回と同様本人はこれが非常に嬉しいらしい。

## IV 同胞でない双生児との関係

A児は野○〔国〕とは同じ集団に属しているが、以前よりも何か教えてもらうことは少なくなった。

B児も野○とは時々話し合うこともあるが、B児は誰とでも話をする方なので、特に親しいとは云えない。

## 第3回 観察（昭和28年3月2,3,4,5日）

A児欠席のためこの関係は観察不能。

## I 対偶者間の関係

A児が長期欠席のため、観察できなかった。

繁○兄弟の家庭は非常に貧困で、兄弟は長男、次男であり、特に長男のA児は、将来家をみる人間として頼りにされていたが、急性関節炎のため、一年休学しなければならない状態になった。残ったB児は、そのため自覚して、しっかりするようなところはなく、相変らず、ちょこちょこしている。

## II 2人と集団との関係

上述の理由のため観察できなかった。

## III 集団における態度

B児は特定の集団に属さず、なにか目立った騒ぎや遊びをしているところに誰彼なしにとびこんでいく。

相変らず落ちつきなくちょこちょこして主体性がなく、度外れた騒ぎをして人の関心を得ようとしているようである。例えば高校生の間にまじってピンポンをみている間でも、殊更大げさな応援や喝采をして、人の注意をひこうとする。

固定した友達はなく、集団をわたり歩く野次馬的存在で、彼の馬鹿騒ぎさえまわりからみとめられないことさえある。

級友からはただ道化役として面白がられ、可愛いがられているのだが、B児はそれに満足している。

#### IV 同胞でない双生児との関係

前回の観察までは、野○とやや親しかった、今は殆んど交渉がない。

平 ○ 姉 妹

第一回 観 察 (昭和28年 6月29,30日 7月1,2日)

#### I 彼の同志の関係

密		離
支配的	●	従属的

#### II 彼と集団との関係

二人で対抗する	●	対抗しない
同じ集団にむすびつく	●	むすびつかない
別々の集団にむすびつく	●	むすびつかない

#### III 他の団との関係

密		離
	●	

#### IV 集団における参加度、安定性、協調性、指導性

積極的に参加	●	消極的
うけいれられる	●	歓迎されぬ
自由奔放にする	●	えんりょがち
遊びにとけこむ	●	熱心でない
まとめ役	●	ぶちこわし
いじめるけんかをする	●	いじめられる
人気ものになる	●	きらわれもの
ボス的、自己中心的	●	他人の意志を重んじる
リーダーになる	●	従属的
集団における総括的参加度	●	

#### V 集団にはいらぬ場合

集団に働きかける	●	無関心である
集団からさそいかける	●	忘れられている
ひとりをたのしんでいる	●	淋しそうである

#### I 対偶者間の関係

##### (1) お互いの関係

級の中で座席が、割合に離れているせいもあり一緒にいることはない。級の女子全体が、一つの遊びをするような時、一緒になっても、2人は特に親愛の情を示さない。また集団に結びつく場合には、2人が協同して参加しようとせず、むしろ自分を受け入れて貰うためには、互にライバル的関係に立つこともある。

##### (2) 兄弟的関係

2人は離れているが、B児の方には、それでもいくらか相手に近づこうという傾向があるようだ。2人が交渉をもつ時は、B児の方がいくらか支配的、勝気である。

#### II 2人と集団との関係

2人も殆んど集団に加わらず孤立している。それでいて2人がお互に話をするでもなく、各自の座席から、ぼんやりとみんなが遊んでいるのを眺めている。

#### III 各児と集団との関係

この組の女子は割に活潑で、4,5人のものを中心にしてまとまって遊ぶことが多いが、平○姉妹は、親しい友達も、所属している group もない。みんなが元気に遊んでいると、いかにもはいりたそうに傍観しており、明かに孤立している。級の殆んど全部の女子が一緒に遊ぶような場合には、その大きな group に入るが、その中でも、やはり孤立的である。2人とも、この group の中心的な別々の2人に、追従的に結びつこうとしているが、相手にされない。B児の方がA児よりやや積極的である。

大きな group の中では、遊びそのものには割に熱心に興ずるが、対人関係では孤立し、殆んど口をきかない。皆の話す事を、隅の方で聞いている。

級友は彼女達を意識的にのけものにするわけではないが、彼女の方から group に加ろうとしなければ、全然忘れられている。さそいかけられるような事は殆どない。それに彼女自身もなかなか group に加ろうとせず、煮えきらないぐずぐずした態度で、級友の集りから孤立している。彼女等の存在は殆んど無視され、彼女が集団にはい

る事はあまり歓迎されない。

#### IV 同胞でない双生児との関係

女子の双生児は4組いるがこれらとは殆んど交渉がない。

お互の存在に特別な関心を示さない双生児の特徴についてまとめてみると、

##### 集団への参加

集団に参加する場合に、相手の存在が、positiveにもnegativeにも影響しない。相手に対して一つの決った態度を保持しない。同じ集団の中に一緒にいる時もあるが、別々の集団にいる時もあり、その場その場によってきわめて流動的に、自然に変化する。

例えは、伊○兄弟などは、B児は運動が下手で、ソフトボールなどあまりしないが、A児は好きな方で、時にはピッチャーなどする時もある。こういう時には2人は全然交渉がないが、雨が降ったり、ソフトボールをしない時には、2人が一緒になって他の双生児を加えた小集団をつくり、その中でA児がleaderになり、B児がこれに従順に従っていることもあった。

##### 集団との対抗関係

第17表に示すように2人が組んで集団に対抗するというような場面は殆んどみられない。ただ入学当初繁○兄弟が級友からハムソーセージなどとからかわれると、2人してふざけながらとびかっていっかたことが2,3度みられた程度である。この繁○兄弟も、第2回目の観察からはこのような行動はみられず、その他の双生児には、全然みられなかった。

第 17 表

観察	E Z		Z Z		U K		
	M	F	M	F	M	F	
	繁○	内○	安○	藤○	伊○	平○	
第1日	1 ×	2 ×	3 欠	×	×	×	×
2	○	×	欠	×	×	×	×
3	×	×	欠	×	×	×	×
4	○	×	欠	×	×	×	×

#### 2人の関係

相手に対して、いつも親愛の情を示していることはないが、時には、2人だけで話し合っていることもあります、時にはお互に全然かわりのない人間のように、別々に行動している時もある。このように、2人の関係としては、一つの特色を摑みにくいが、そこに2通りのタイプが観察される。一つは、行動にみられるとおり、相手に対する関心があまりないもの、他の一つは、かなり相手の存在を気づかう気持はあるが、学級集団という環境にあるため、2人が一緒にになにかするというが、恥しい、てれくさいといった気持から、あまり一緒になろうとしないのではないかと思われるものである。2人一緒にいたいという気持よりも、環境からうける心理的な圧力に、より強く影響されているのではないかと思われるのである。

例えは、安○兄弟は教室や運動場で、すんで行動をともにしようとする傾向は余りみられず、休み時間なども全く別々にすごす場合が多いが、学校や見学の時の帰りなどは非常に親しそうに一緒に帰っていく。また、たまたま他の友達が近くにいなかったり、いても極く僅かであると、ふとしたはずみに一緒にあって、他の友達の存在を忘れてしまったように、柔道のまねのようなことをして、非常に親しげに遊ぶのである。

この例のように顕著でなくても、学校では別でも帰りは一緒にいうように、なにか他人に対する遠慮の気持があるのでないかと推測される場面がみられるのである。

#### 4. 徹底的に無関心で、離れている 双生児

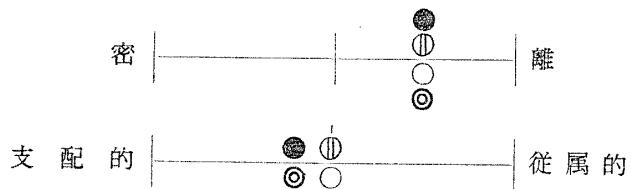
このような双生児は、2人の関係はもっとも疎遠で、同じ組にいながら、殆んど一緒に遊ぼうとしない。相手がどのような行動をとろうと一向無関心である。極端な場合には、組の殆んど全部のものが一つの集団を作り、遊んでいても、相手がその中で活潑にふるまっていると、自分は決してこれに加わらないというような、意識的に離れていようとするものである。

このような双生児の代表的な例として、27年度入学の浅○姉妹、28年度入学の佐○姉妹をあげることができる。

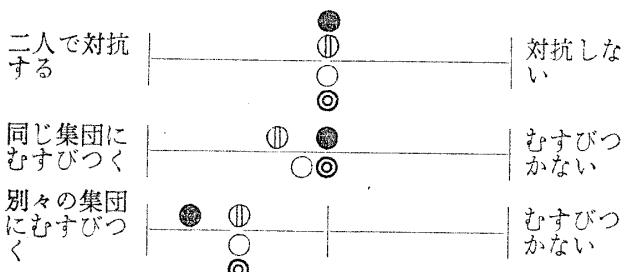
### 浅 ○ 姊 妹 (EZ)

# 第1回 観 察 (昭和27年 4月10, 11, 14 …前半 15, 16, 18 …後半)

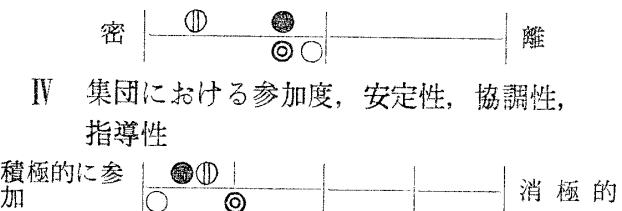
## I 友同志の関係



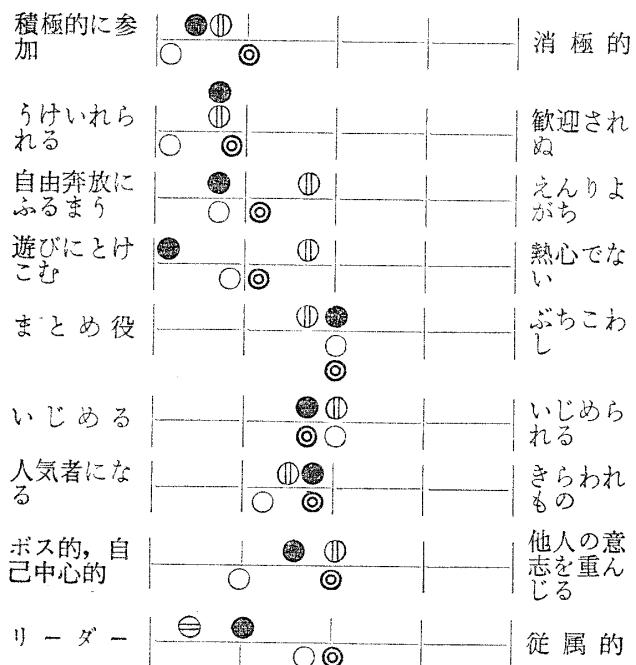
## II ④と集団との関係



### III 他の図との関係



## IV 集団における参加度、安定性、協調性、指導性



## I 対偶者間の関係

お互の存在を少しも気にしない。2人の間には、吉〇兄弟のような、兄弟的性格差異はみられない。

A児はB児に対して、いささかボス的な態度が、観察後期にみられた。例えば、少し気にさ

わったことがあったので、B児がどんなに呼んでも、返事をしないような場合があった。

B児は全体的にA児よりも無邪気で子供らしく、A児に対しては、いくらか尊敬しているようなところも見られた。例えば水泳や勉強の話をしても、A児の方がいつも出来るといっていた。

2人が特に仲が悪いというようなことは少しも見られないが、吉〇兄弟のように相手を思いやる気持は乏しく、2人ともかなり負けん気で、競争意識が強いらしい。

## II 2人と集団との関係

同じ組にいるが、完全に別々の集団に属し、その中で、各々自由に活潑に活動している。interview の時に、いつも一緒にいるから別々に遊んだ方が面白いといったことがある。

### III 各組児と集団との関係

組の2つの代表的集団にそれぞれ属している。

2人とも2つの集団のleader、又はこれに準じるような中心的位置にいる。

A児は自分の要求に従って、勝手に行動し、これに友達がついていくようである。例えば人のお手玉を使ってどんどん遊び始め、持主の意志などにこだわらず、遊びの中心になってしまうことがあった。

B児もA児と同様、活潑であり、思っていることは何でも口に出し行動する。かなり勝手に行動するが、いつも2,3人後にについている。

男子に対して少しもおじおじすることなく、やたらにうるさい音をたてると、静かにしなさいと大声で云つたり、又口で応酬することもあった。まわりの殆んど全部の人が、ゴムトビをしていても、自分があまり得意でない遊びの時には、這入らずに傍観している。

観察前期においては、B児の方が活潑であったが、後期ではA児の方が、全体的に活潑のようであつた。

特に leadership の点で、いずれも集団の中心にあるが、A児の方が、積極的であった。

2人に対する級友の態度をみると、2人とも勝手な振舞が多くても、少しもきらわれている様子はない。これは彼女等の無邪気さ、悪意のない明朗さによるものと思われる。

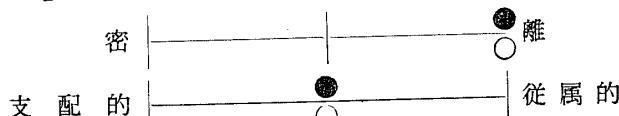
級友は彼女等を双生児として特別に扱うことはないが、2人で軽い口争いをして、B児が、ミーチャンはいつもざるばっかりしているわとみんなに訴えても、まわりのものは、我々の口を入れるべき時ではないというように、2人の顔を眺めて、にやにや笑っていた。

#### IV 同胞でない双生児との関係

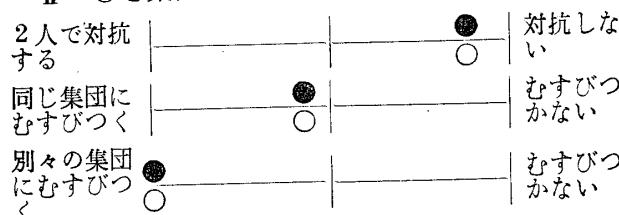
この組には、女子双生児では、谷、平〇の2人がいる。その2人とは時々遊ぶ時もあるが、必ずしも親しくない。男子の双生児、大〇とは全く交渉がない。

## 第2回 観 察 (昭和27年7月4,7,8,9日)

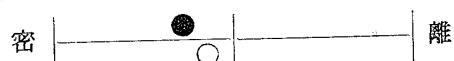
## I 同志の関係



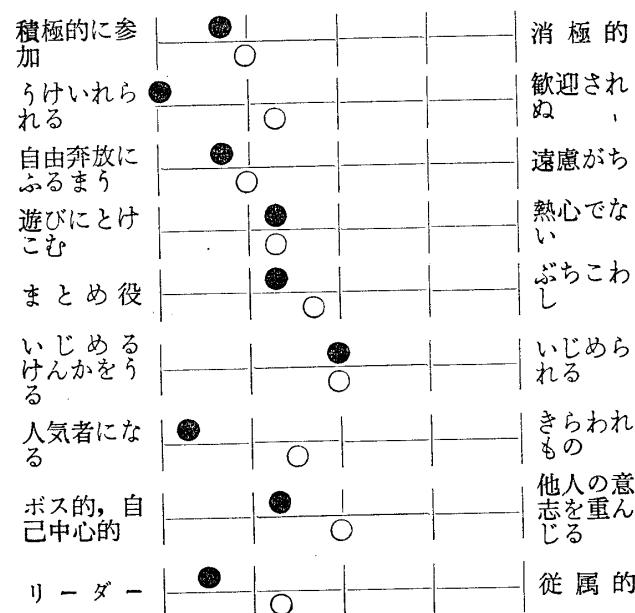
## II 父と集団との関係



### III 他の図との関係



## IV 集団における参加度, 安定性, 協調性, 指導性



I 対偶者間の関係

第1回観察の時よりも、はっきりと離れている。

従って、以前には、ややA児の支配に対して、B児の従属的態度がみられたが、今回の観察では全くみられず、お互の存在に無関心になってい る。

これは、お互に反激しあって離れているということも、幾分見られるだらうが、それよりも各自の要求のままに行動した結果ではないかと思われる。例えば2人が、体操などで一緒になった時には、他の友達同志よりも密に協力しあっている。

## II 2人と集團との関係

全く別々の集団に参加し、授業以外には一緒になることは殆んどない。

### III 各児と集団との関係

第1回観察の時には大体2つの集団にわかれていったが、今回は少人数の集団にわかれ、この中でもっとも目立つのは、A児を中心とする5、6人の集団で、遊ぶ時には、これが中心になる。しかしB児は、この時にも一緒になろうとせず、鈴○と2人で、孤立している。

A児は組全体の leader 格となり、第1回観察の時よりも、活潑になった。

相変らず、自己中心的傾向が強いが、それでいて、少しも、人からきらわれていないようである。

B児は上述のようにいつも鈴〇と2人で行動している。この2人の関係は非常に密である。

2人の間では、僅かではあるが、B児がleadershipをとっているようにみられる。第1回観察の時に見られたような、活潑すぎて、いさか我儘な行動というのは、あまり見られず、2人は全く仲良しである。A児が馬とびなどをして、活潑であるのに比べて、B児は、四つ葉のクローバー探しなどをして、行動の上では不活潑である。組全体の集団からは孤立しているが、少しも淋しそうなところがなく、2人でいることが、非常に楽しいようである。

級友の態度をみると、A児に対しては彼女の要求を殆んど、そのまま受け入れ、元気なよい友達

として扱っている。

B児に対してはA児に比べて、目立たないため、あまり人気がないが、決してきらわれていない。

以前よりも2人がはっきりわかっているせいか、双生児として特別に扱うことは、全然みられなかった。

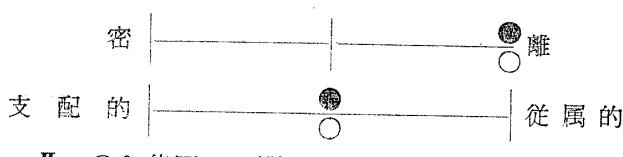
#### IV 同胞でない双生児との関係

A児は平〇、谷とは、一緒になるが、特に親しい集団には含まれていない。

B児はどの双生児とも、殆んど交渉なし。

### 第3回 観察 (昭和28年 3月2,3,4,5日)

#### I 彼の同志の関係



#### II 彼と集団との関係

二人で対抗する	——— ———	対抗しない
同じ集団にむすびつく	——— ———	むすびつかない
別々の集団にむすびつく	——— ———	むすびつかない

#### III 他の団との関係



#### IV 集団における参加度、安定性、協調性、指導性

積極的に参加	——— ——— ——— ———	消極的
うけいれられる	——— ——— ——— ———	歓迎されぬ
自由奔放にふるまう	——— ——— ——— ———	遠慮がち
遊びにとけこむ	——— ——— ——— ———	熱心でない
まとめ役	——— ——— ——— ———	ぶちこわし
いじめるけんかをうる	——— ——— ——— ———	いじめられる
人気者になる	——— ——— ——— ———	きらわれるもの
ボス的、自己中心的	——— ——— ——— ———	他人の意志を重んじる
リーダー	——— ——— ——— ———	従属的

#### I 対偶者間の関係

以前よりも、一つの遊びを中心にして、一緒になることが多かった。

A児には姉らしい思いやり、妹の世話をなど少しも見られない。

B児にも妹らしい甘えた点、又姉に対して従属的なところは全くない。

#### II 2人と集団との関係

相変らず属する集団は異なるが、遊ぶ時には一緒になるようになった。これは前回には全くみられなかったことである。しかしそれは、2人が以前より親しくなったからというのではないらしい。お互に別の遊びがしたくなると、なんの未練もなくわかれてしまう。ただ遊びが面白い時だけ一緒になるらしい。

#### III 各児と集団との関係

全体に組の集団のわかれ方が、はっきりしてきた。大きく3つの集団にわかれ、この中A児を中心とした集団と、松〇を中心とした集団とか一緒にになって活潑に遊ぶ。

B児と鈴〇は、以前ほど孤立していないが、他の集団と一緒にすることはやはりあまり多くない。

A児は特に親しい友達ではなく、交友範囲は広く誰とでも遊ぶ。以前より一層活潑自己中心的で、人をぐいぐいひっぱっていく強いleadershipを持っていますので、いつも遊びの中心になっている。全く他人の意志を無視しても平氣である。一緒に遊んでいても、自分がいやになるとさっさとやめてしまう。

B児は鈴〇と相変らず親しい。しかし2人だけで、大勢の集団から離れても、しばらくすると、まわりに2,3人友達が寄ってくるというように、完全に孤立していることは少なくなった。A児よりも他人の意志を尊重する。例えば大勢で遊んでいて、A児が突然やめるといって遊びから飛び出し、自分の好きなことを始めて、B児は“ずるいわねー”とそばの友達にいいながら、自分自身もその遊びに飽きてしまったようであったが、遊び続けていた。

級友はA児があまり自分勝手な行動をした時

には、ちょっと反感を持つこともあるようだが、彼女の始める遊びの面白さと、無邪気な屈託のなさに、自らひきづられていくようである。

B児はA児のように積極的に働きかけず、むしろ無関心、消極的であるが、人気はA児よりもあるくらいである。B児が他人の意志を尊重するためからかもしれない。

#### IV 同胞でない双生児との関係

A児は特に親密な関係はないが、大勢で遊ぶ時には一緒になる。B児はA児よりも平〇と交渉が多い。谷とは全く関係がない。

次に佐〇姉妹についてみようと思う。

#### I 対偶者間の関係

##### (1) お互いの関係

四日間の観察期間中、2人の間では殆んど交渉がみられない。相手の存在に徹底的に無関心であり、相手がいかに1人ぽつんとして淋しそうであっても、又相手がいかに愉快そうに遊んでいても、なぐさめたり、心配したり、一緒に遊ぶということは毛頭ない。お互に話をしているのをみかけたのは、1回だけである。

##### (2) 兄弟的な関係

一度、B児が笑っているのをたしなめていたことから推察して、案外、A児は姉らしい態度をとっているのかもしれない。しかし何分2人一緒にいることがないのではっきりしない。B児もなかなかしっかりしており、友達には姉のようにふるまうこともあり、妹として、A児に頼っているとも思われない。

#### II 2人と集団との関係

お互に全く別々に行動し、B児か或集団に加っても、A児は参加しない。

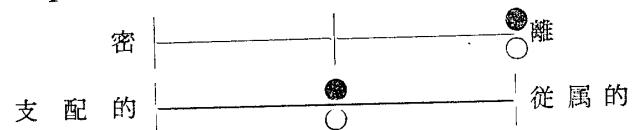
#### III 各児と集団との関係

この組の女子は1人の leader に統率された完全な group をなしていないが、4,5人の活潑なものを中心にして組の殆んど全部のものがジャンケン遊びをしたりして、漠然とした一つのまとまりがある。A児は遊びの形では決してこれに参加せず、みんながいかにも愉快そうに遊んでも、1人ぽつんと窓によりかかって外を眺めていたり、にこりともせずにみんなの遊んでいるのを

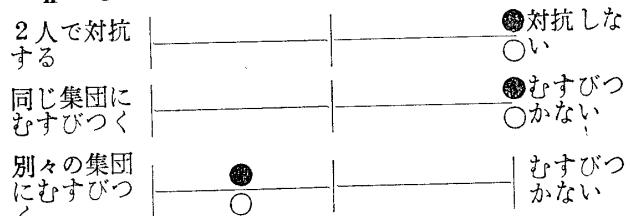
#### 佐〇姉妹 (ZZ)

第1回 観察 (昭和28年6月29,30)  
(7月2,3日)

#### I ②同志の関係



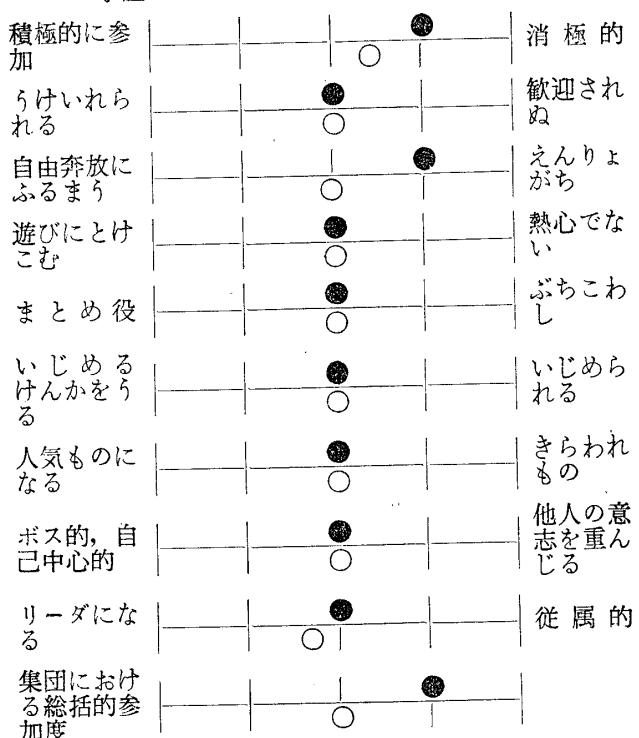
#### II ③と集団との関係



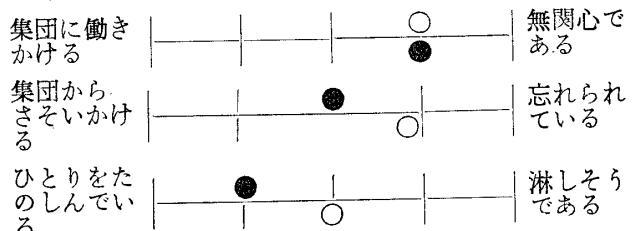
#### III 他の団との関係



#### IV 集団における参加度、安定性、協調性、指導性



#### V 集団にはいらぬ場合



みている。これに対して、B児は、大抵この group に加わり、特に齊○という親しい友達があり、これといつも一緒に行動している。

A児は group に対しては全く超然としていて、そんな子供らしい騒ぎなど、もう面白くないというような大人っぽい態度でいるが、事ある時にはかなり積極的にふるまう。例えば、体操と社会が交替したと先生から伝えられた時には、A児を中心にして不満な口吻がもらされた。

B児は決して消極的ではないが、目立つ存在ともいえず、いつも楽しそうに遊んでいる。

この様な A児に対して、級友は無視したりせず、むしろなにか一目おいて、みんなの方から A児へ働きかける場合が多い。

B児は特に尊敬されたり、親しまれているわけではないが、好感はもたれうけ入れられている。

#### IV 同胞でない双生児との関係

A児は、ジャンケン遊びの中心人物の1人の折○とやや親しい以外には、積極的関係はない。B児にはあげるべきものはない。

お互に無関心で、離れている双生児の特色を要約してみると次のようになる。

##### 集団への参加

上述の2例のように、相手がどの集団に参加し、どのようにふるまおうと、それによって、自分の行動をどうしようということは全然考えない、お互の行動に無関心であるもの、また、さらに相手がいるから、その集団には参加しないといった意識的に離れようとするものもある。いずれに

第 18 表

観察	E			Z	F	ZZF	P	Z
	浅○	石○	折○	佐○	加○	手○	星○	
第1日	1 ×	2 ×	3 ×	×	×	×	×	×
2	×	×	×	×	×	×	×	×
3	×	×	×	×	×	×	×	×
4	×	×	×	×	×	×	×	×

しても、他の全般的な行動と同様、集団に参加する場合にも、個々別々に、双生児という2人のむすびつきを離れた1個人の間として、自由に行動するのである。

##### 集団との対抗関係

第18表に示すようにお互に接触する場合が殆んどないので、集団に対して相手をかばうというようなことは全然なく、むしろ、浅○姉妹の場合には、集団と一緒に相手の行動を憤慨する場合もみられた。

またお互に回避するという関係は、学級集団の中では、あまりあらわな行動としては示めされない。これは級友の前だからという気がねのためそのような行動が直接に表われにくいとも思われる。従って、現象的に多くみられる相手に対する極度な無関心の中には、かなり強い相手に対する回避の気持もあるのではないかと推察される。

第19表 対偶者間の選択及

#### 1. 昭和27年入学児

卵性・性別	氏名	Sociometry回数	社会距離点	I			II			III			IV			V			VI		
				1 対偶者間 の選択	2 対偶者間 の選択	3 対偶者間 の選択															
EZM	吉○A B	6 7	×	I 8	×	I 2	×	I 4	2	×	I 7	5	×	I 2	4	×	I 7	9	×	I I	
EZF	浅○	6 9	×	I 3	4	×	I 10	8	×	I 9	11	×	D 6	6	×	D 6	5	×	I I		
PZM	星○	3 4	×	D 12	0	×	D 4	9	×	D 10	4	×	D 7	5	×	D 3	6	×	D D		

このように何故2人が離れているのか、又意識的に離れようとしているのか、という問題については別に研究をするとして、観察から推察されることの一つは、お互の間に強い競争意識があるからではないかと思われる。

例えば浅〇姉妹の場合、A児が大せいのものと楽しそうにゴムトビをしていたが、B児はこれに加わろうとしない。何故一緒に遊ばないのかと聞くと、“だって〇〇ちゃんはゴムトビがうまいんですもの、私は下手よ”といったことなど、他人が自分と相手と比較し、自分が相手よりも下に評価されることを非常にいやがっているようであった。

また、双生児として、2人1組の人間としてみられることをきらう。相手は相手、自分は自分でいう自分の個性、性格を尊重しようとする傾向が強く、双生児であるよりも普通の兄弟として生れた方がずっとよかったと語ったものもある。

#### V Sociometry にみられる対偶者間のむすびつき

Sociometryにおいては、双生児は対偶者で選択しあうであろうか。又、2人とも同じ集団に属しているだろうか。又Sociometryにみられるむすびつきと、行動観察でみられたむすびつきと同じであろうかなどの疑問をもってSociometryの結果を考察してみる。

Sociometryは第1章で記述したように、“こ

の組の中で今親しくしているお友達の名前を3人あげて、親しい順に1,2,3と番号をふって下さい”と指示して行ったものである。

Sociometryは入学から、1ヶ月おきに必ずとられている。従って27年入学児は現在までに12回、28年入学児は8回、29年入学児は2回行われている。(昭和29年7月現在)

Sociometryの選択が同じ組のうちに限られているので、同じ組にいる双生児のみ23組について、対偶者間の選択、又対偶者のむすびつき、及び社会距離点についてみると、第19表のようになる、入学年度によって、Sociometryをとった回数がちがうので、入学年度でわけて示す。

以上の表から、次のようなことが考えられる。

1) 対偶者で同一の集団に属するものが多い。即ち、28年度入学児には8回のSociometryが行われているが、8回とも同じ集団に加わっているものは、18組中7組もあり、7回同じ集団に属しているものが2組もある。その他、27年入

第19表1—3の説明

○ 対偶者のいずれかで選択している。

(A → B) A児がB児をえらんでいる。

(B → A) B児がA児をえらんでいる。

(A ↔ B) A児、B児相互にえらびあつてある。

× 選択なし。

I 二人とも同じ集団に属する。

D 二人は別々の集団に属する。

#### びむすびつきと社会距離点

VII			VIII			IX			X			XI			XII			社会距離点	対偶者	同一集団に属する回数	
1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3				
																		総計	平均		
6 6	×	I 5	6 5	×	I 0	0 0	×	I 2	6 2	×	I 10	7 7	×	I 6 7	6 7	×	I 6 7	67 64	5.6 5.3	0 0	12
2 3	×	I 6	8 6	×	I 3	7 3	×	I 3	3 3	×	D 4	0 4	×	D 7	5 7	×	I 6 8	66 68	5.5 5.6	0 0	9
5 5	×	D 4	6 4	×	D 3	6 3	×	D 2	9 2	×	D 8	5 8	×	D 8	10 8	×	D 7 8	76 73	6.3 6.1	0 0	0

2. 昭和28年入学児 (5回目以降は紙面の都合上次頁にかかげる)

卵性・性別	氏名	Sociometry回数	I			II			III			IV			1
			1 社会距離点	2 対偶者間の選択	3 対偶者の属する集団	1	2	3	1	2	3	1	2	3	
EZ_F	加 ○ 4 4		×	I 7 4	×	I 4 6	×	I 5 7	×	I 7 4					
	永 ○ 7 5	○(A→B)	I 10 8	○(B→A)	I 4 7	×	I 3 5	○(A→B)	I 10 8						
	内 ○ 6 7	○(A↔B)	I 7 10	○(A↔B)	I 5 8	○(A→B)	I 4 7	○(A→B)	I 13 4						
	中 ○ 12 10	×	I 2 3	×	I 3 8	×	I 8 5	×	I 3 3						
	竹 ○ 10 3	×	D 17 5	○(A→B)	I 15 7	○(B→A)	I 10 9	×	D 17 6						
	館 ○ 0 0	×	D 2 3	○(A↔B)	I 0 3	○(A→B)	I 0 3	○(A→B)	I 2 3						
EZ_F	折 ○ 11 5	×	D 10 10	×	D 13 15	×	D 3 12	×	I 10 13						
	八 ○ 9 8	○(A↔B)	I 12 11	○(B→A)	I 6 8	○(A→B)	I 5 5	○(A→B)	D 9 14						
	橋 ○ 1 3	×	D 0 6	○(A→B)	I 0 8	○(A↔B)	I 5 12	○(A→B)	I 0 6						
	石 ○ 11 12	×	I 0 1	×	I 1 3	×	D 3 6	×	I 3 4						
	内 ○ 2 3	×	D 2 0	×	I 0 3	×	D 0 0	×	D 2 0						
ZZ_M	長 ○ 6 4	○(A→B)	I 1 5	×	I 8 8	×	I 7 10	×	I 1 5						
	溝 ○ 3 3	○(A↔B)	I 1 2	○(A↔B)	I 7 5	○(A↔B)	I 9 8	○(A↔B)	I 8 3						
ZZ_M	佐 ○ 2 13	×	I 6 7	×	I 2 10	×	I 4 6	×	I 6 7						
卵性不明M	伊 ○ 8 4	×	I 5 5	×	I 4 5	×	I 3 3	×	I 5 5						
卵性不明F	平 ○ 3 1	○(B→A)	I 0 0	×	D 0 0	×	I 0 0	×	D 0 0						
PZ	加 ○ 7 1	×	D 2 0	×	D 6 2	×	D 9 2	×	D 9 1						
	手 ○ 1 6	×	D 3 4	×	D 3 7	×	D 3 5	×	D 3 4						

3. 昭和30年入学児

卵性・性別	氏名	Sociometry回数	I			II			社会距離点		対偶者選択回数	同一集団に属する回数
			1 社会距離点	2 対偶者間の選択	3 対偶者の属する集団	1	2	3	統計	平均		
ZZ_M	安 ○ 9 7		○(A↔B)	I 5 1	○(B→A)	I 14 8	7.0 4.0		2	2		
ZZ_F	藤 ○ 4 7		×	I 1 7	×	D 5 14	2.5 7.0		0	1		

V		VI			VII			VIII			社会距離点		対偶者 者の 選択 回数	同一 集団 に属 する 回数
2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3	総 計	平 均		
×	I	6 5	×	I	6 8	×	I	5 5	×	I	44 43	5.5 5.5	0	8
○(A↔B)	I	3 3	○(A→B)	I	1 2	○(A→B)	I	5 2	○(A→B)	I	43 40	5.5 5.0	7	8
○(A↔B)	I	2 6	○(A→B)	I	0 7	○(A→B)	I	3 1	×	I	31 38	3.9 7.2	7	8
×	I	3 3	×	I	0 0	×	I	3 2	×	I	34 34	4.2 4.2	0	8
○(A↔B)	I	10 10	×	I	6 9	×	D	10 6	×	I	95 55	11.9 6.9	3	6
○(A↔B)	I	0 3	○(A→B)	I	0 0	×	D	0 0	×	D	4 15	5 1.9	5	5
○(B→A)	I	12 18	×	D	14 15	×	I	4 14	×	I	82 102	10.2 12.8	1	4
×	I	6 5	×	I	6 12	×	I	4 6	○(A→B)	I	63 69	7.9 8.6	5	7
○(A→B)	I	3 1	×	I	4 3	○(B→A)	I	3 3	○(B→A)	I	16 42	2.0 5.2	6	7
×	I	0 7	×	D	1 6	×	D	0 2	×	D	19 41	2.0 5.4	0	4
×	I	0 2	×	D	3 0	×	D	0 0	×	D	9 8	1.1 1.0	0	2
×	I	6 11	×	I	8 7	×	I	5 1	×	I	45 51	8.6 6.4	1	8
○(B→A)	I	6 7	○(A↔B)	I	3 5	○(A↔B)	I	3 1	×	I	40 34	5.0 4.3	7	8
×	I	0 4	×	D	3 5	×	I	1 5	×	D	24 57	3.0 7.1	0	6
×	I	6 5	×	I	7 3	×	I	6 4	×	I	44 34	5.5 4.3	0	8
×	D	0 0	×	D	3 0	×	I	0 0	×	D	6 1	0.8 0.1	1	3
×	D	7 2	×	D	10 8	×	D	5 5	×	D	55 21	6.9 2.7	0	0
×	D	5 4	×	D	3 5	×	D	1 3	×	D	22 38	2.8 4.8	0	0

学児では12回のSociometryを全回とも同じ集団に加わっているものがある。

2) この傾向は女子よりも男子に強い。女子では全回とも同じ集団に属するものは一人もいない。このような傾向は行動観察でみられた結果と一致する。

3) PZ 3組は、ともに全然別々の集団に属している。

4) 社会距離点が低く、孤立している双生児は、お互同志えらび合うか、または全然別々の集団に属している。(Sociometryをとる度にえらぶ人が変り、いつもその時の人気ものをえらぼうとする傾向がある)。

5) 対偶者間の選択は、それほど多くない。いつも対偶者で同じ集団に属している双生児でも、お互に選択しあうとは限らない。

6) 社会距離点は対偶者で同程度の点をとっているものが多い。即ち平均で1以内の差しかないものを捨うと、23組中、10組みられる。社会距離点の高く、集団で中心的位置にある双生児は二人ともそうであり、又、人からかえりみられず孤立しているものは二人ともそういう傾向にあるものが多い。

これは、第一章の第三節で示したように双生児が選ばれる場合、二人一緒に選ばれるか、又は二人とも選ばれないという場合が多いことを

示している。

次に、Sociometry でみられる対偶者間のむすびつきと、行動観察でみられたそれと関連があるかを調べてみよう。Sociometry 及び行動観察とも、対偶者間のむすびつきの度合を、いつも同じ集団に参加する(第20表○で示す)、大体同じ集団に参加する(○)、別々の集団に属する(×)の三段階にわけて、比較すると、次の表のようになる。

第20表 Sociometry と行動観察における対偶者のむすびつき

入学年度	27			28																	
	EZM	EZF	PZ	EZM						EZF						ZZM	ZZF	不明	PZ		
氏名	吉○	浅○	星○	加○	永○	内○	中○	竹○	館○	折○	八○	橋○	石○	内○	溝○	長○	佐○	伊○	平○	加○	手○
Sociometry	◎	○	×	◎	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	×	
行動観察	◎	×	×	◎	○	○	○	○	○	×	○	○	×	○	○	○	○	○	○	×	

註 29年度入学児は Sociometry を2回しか行っていないので、行動観察と比較するには不充分なので省く。

第 21 表

Socio-metry 行動観察	いつも 同じ	大 同 じ	別 々	計
いつも同じ	9	2	0	11
大体同じ	1	0	2	3
別々	0	4	3	7
計	10	6	5	21

この Sociometry と行動観察の結果の関係をみると、第21表のようになる。両者の無相関を帰無仮説とし、無相関検定法によって、それを棄却した場合の危険率を計算すると、0.003%以下であった。従って、双生児対偶者間のむすびつきについては、Sociometry の結果と、行動観察の結果には高い相関があるといふことができる。

## 6. 同胞でない双生児同志のむすびつき

双生児は、双生児という特別な親密感から、双生児同志で集団をつくるといふことはない。

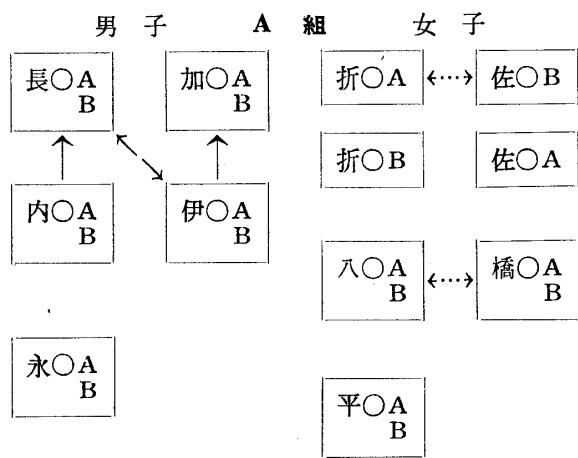
行動観察によって、この双生児と双生児とのむすびつきについてみると、大体、第1図のような結果である。

これによつてみると、行動観察では、特に親しい双生児同志のむすびつきが、少数みられる外は、それほど双生児だからといってむすびつくことは少い。例えば、28年入学児ではA組に10組の双生児があり、組のちょうど半数をしめているので、双生児間の交渉は、他の組に比べて、かなり多い。しかし、これも大きい集団をなして遊ぶ男子双生児に多くみられ、女子双生児では、殆んど目立つような関係はない。男子双生児で、一番目立つのは伊○、加○、長○兄弟のむすびつきである。

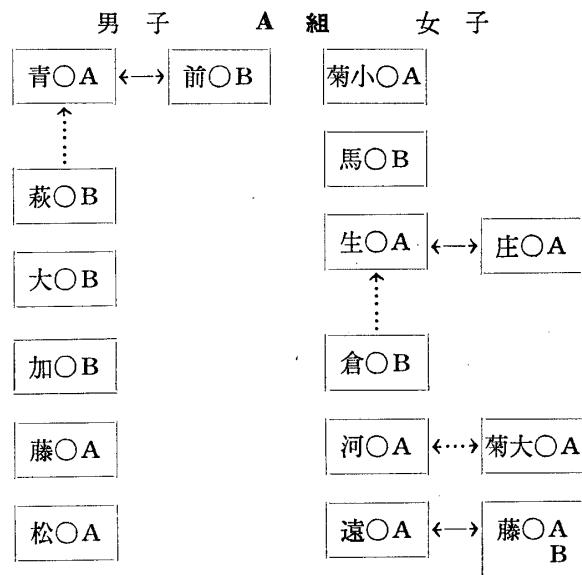
又29年度では、ZZ 2組を除いて、他の全部の双生児が、A児とB児と別々の二つの組に入れられているが、面白いことには、A組で或双生児の1人と、或双生児の1人とが、仲が良いと、B組でも同じような組合せが、2,3みられることがある。例えば、青○、前○兄弟、庄○、生○姉妹のようなものである。A組とB組は全体に交流も多いので、実際に他の組の双生児とも接する機会

第 1 図 行動観察でみられた双生児同志のむすびつき

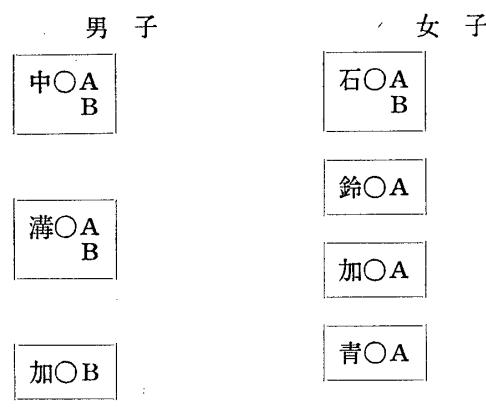
28 年 入 学



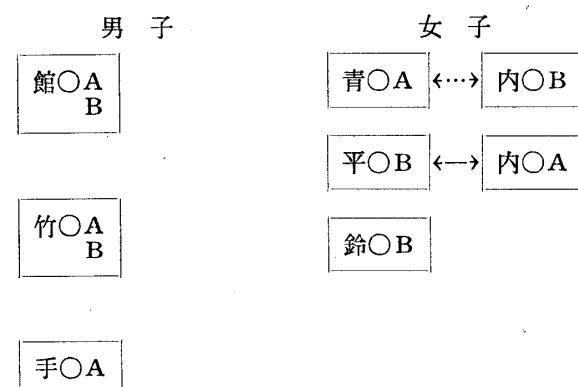
29 年 入 学



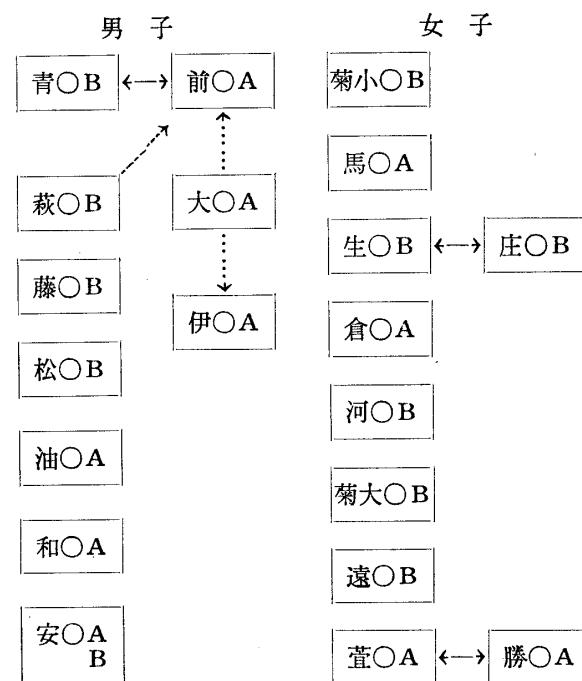
B 組



C 組



B 組



←→ 特に親しい

←…… やや親しい

↔ 追隨的に親しくしている。

があるのであるが、また同じような性格の双生児が、同じような性格の相手を求めるのではないかといったことも考えられ、興味ぶかい。

次に Sociometry の面から、双生児同様のむすびつきをみると、大体、行動観察と同様の結果であるが、A組では、双生児だけでもむすびつき、他の集団からは全然孤立した集団がみられた。このような集団は、行動観察でも、その関係がみられた伊○、加○、兄弟の間にみられ、8回のSociometry を通じて、終始くづれることなく続いている。その他に、同じくA組の女子双生児の八○、橋○姉妹の間にもみられ、2組の姉妹が相互に選び合って、8回のSociometry のうち7回特殊な集団を形成している。(8回目にやや崩れかける)。その他、A組においては、連鎖的なつながりが、双生児間に多くみられる。

A組以外のB、C組では、殆んどそのようなむ

すびつきはみられない。

29年入学児では、別々の組で、双生児同志が、同じようなむすびつきを示すことは、行動観察よりも、更に顕著にみられる。即ち、行動観察でみられた青○、前○兄弟のむすびつきを中心として、油○、萩○、伊○加○、大○兄弟も、別々の組にありながら、同じようなむすびつきを示している。女子双生児でも河○、菊○、姉妹に、相○、萱○姉妹が結びつき、行動観察でも顕著だった庄○、生○姉妹も相互にえらびあっている。

次に、Sociometry で双生児は双生児だけでまとった集団をつくろうとするか、どうかについて、各組別にみたいと思う。

即ち、双生児同志でもむすびついた Sub-group が、どの程度、他に対して独立度を持っているかと考えて、Sub-group の独立度を算出する式を用いると、結果は、第22表のとおりである。

第 22 表

入 学 年 度		28								29				
		S M 回 数	1	2	3	4	5	6	7	8		S M 回 数	1	2
		ク ラ ス									ク ラ ス			
	A		0.08	0.16	0.28	0.25	0.25	0.04	0.25	- 0.28	A		1	- 0.13
	B		1	- 1	- 0.5	- 1	- 0.13	- 1	- 0.75	- 1.25	B		0.38	- 0.25
	C		-	0.5	- 0.25	0.75	0.25	- 0.25	- 0.75	- 0.75				

この結果にみられることは、双生児同志でもむすびついた group の独立性はきわめて弱く、双生児だけでまとった集団をつくっていないということになる。即ち、双生児が双生児だからといって双生児を選ぶ傾向があるとはいえないということになる。

男女別にも算出してみたが、その独立度に男女

の間でも差はみられなかった。

このようにみてくると、全体として双生児だからといって、特に双生児同志でまとまるといった傾向は少いが、個々の双生児をみていくと、双生児だけで、特別な group を構成するものもあるといえる。

#### 註

N 1 ..... Subgroup の group とする。

N 2 ..... 一般児の group とする。

S 1 ..... 同じ group 内の者をえらんだ票数の総和。

各人の選択が group 全体の中で独立に、かつ任意に行われると仮定すれば、平均と分散は、

$$\bar{S_1} = E(S_1) = \frac{3n_1(n_1-1)}{n-1} \quad \sigma_1^2 = \frac{3n_1n_2(n_1-1)(n-3)}{(n-1)(n-2)}$$

となり、Subgroup の独立度を

$$d = \frac{S_1 - \bar{S_1}}{\sigma_1}$$

で定義する。

この値が正ならば、Sub-group の独立性の度合が普通よりも高く、負ならば低いことを意味する。

## 第3章 双生児の相互関係

双生児はお互にどういう関係をもって、行動するのだろうか。この双生児2人の関係はどうかといふことが、双生児の行動を観察する場合、もっとも興味深いことであった。上述の学校の休み時間を利用して行われた行動観察でも、この問題が、主要課題の1つであった。しかし学校での観察では、双生児2人の関係は、同じ集団の中で、いつも2人が一緒にいる、又、お互の存在に特別な関心を示さない。或は、お互に離れているというようななごく外面向的なつながりしかみられなかった。われわれの求めるところは、このような関係から、更につつこんで、いつも一緒にいるといつても、2人の関係がどのような関係か、例えば本当に協力互助の間柄であるのか、それとも一方が優位にたち、他方がこれに従属している関係にあるのかというより、更にこまかい観察と、このような観察にもとづいて、広く双生児2人の相互関係について探究することである。このような目的に対して、学校での行動観察では、集団と結びつけて2人の関係をみると、2人の関係について更にこまかい究明は難しかった。というのは、学校生活は、一定の時間にくぎられ、このため行動も限定され、例えば2人の交渉も文房具のかしかりなどで、休み時間の話題なども主に勉強のことにもむけられがちなので、本当に自由な行動をみるとできなかった。従って、家庭でみられるような双生児2人の間の自然な交渉はみられなかった。

このような目的を満たすためには、授業時間とはなれた起床から就寝までというような日常生活をつぶさに観察することが必要である。たまたま附属中学校では毎年1年生は7月下旬に約1週間、野尻寮で合宿生活を行うことになっているので、これに参加して、学校生活に拘束されない。日常場面にみられる2人の関係を観察することができた。

### 1. 野尻合宿生活にみられた相互関係

2人の人間がいた場合、どのような関係がみられるだろうか。私達は合宿の観察を始める前に、まず、いろいろの種類の2人の関係について考えてみた。

2人がお互に同じような位置にある対等な関係、一方が優位にたち、他方がこれに従属するという上下の関係、一方が別に指導的でないのに、いつも他方がそのあとばかりくっついていくといった追従関係、更に回避の関係というような4つのtypeの関係を、一応考えてみた。そして、このような関係について具体的な場面をえがきつつ、分類していくとそれぞれ次のような種類の関係があるのではないかと考えた。

即ち、対等関係では

- 1) 平行、独立 いつも対等の立場にあって、お互に1個の独立した人間として、かかわり合いなく行動する。
- 2) 競争、対立 互角の力を互に競い、対偶者を競争相手と考えているような関係。
- 3) 協力、互助 お互に協力し、2人の力を合わせて、1つのことをやっていこうとするような関係。
- 4) 戯れ合い このような関係は、学校の観察で時々観察されるのでつけ加えたのであるが、2人で大ころのようにじゃれ合う、他人の存在など、まるで考えぬように楽しんでいるという関係で、双生児の特色を示す1つの興味ある間柄とも思われる所以、ここに加えた。

上下関係では

- 1) 自然的上下 一方が指導的で、他方がこれに従属的であるという関係が、自然に、全然無理なく行われる。お互にこのような上下の関係をあたりまえとしているような関係、例えば、兄弟の関係のような関係
- 2) 強圧、従属 一方が無理やりに、上位にたって、相手の行動、その他を束縛する自分

の意志を相手に押しつけ、自分の思いどおりにしようとする。これに対して他方は、従順に従うというような関係。

- 3) 強圧、逃避 一方の高圧的な態度に対し、これを避けるような関係。
- 4) 強圧、拒否 一方の押しつけがましい態度に、積極的に非協力的な態度を示す関係。
- 5) 強圧、反抗 更に積極的に、一方の強圧的態度に、反抗を示すような関係。

以上のような関係を考えてみた。

追従関係では

- 1) 歓心、無関心 一方がさかんに他方の御機嫌をとって、この後を追いかけているが、他方はこれに全く無関心であるといった関係。
- 2) 歓心、拒否 一方が他方の後を追って、相手が喜ぶようにいつもしたてに出ているのに対して、他方は、これを煩さがって、拒否するという関係。

回避関係では

- 1) 一方的回避 一方だけが相手を回避する。
- 2) 相互的回避 両方でさけあっている。

No.

VP.	場 所	日 時	日 時 分
日常生活	起床時(起床、洗面、朝礼、体操)	その他(	)
学習	学習(発信、グループ研究)	その他(	)
遊び	水泳(身支度、水泳)	その他(	)
	自由行動(自由遊び)	その他(	)

#### 個々の行動

#### 相互関係

の2つの型を考えてみた。

このように2人の関係として考えられる、いろいろの関係を予め想定しておいて、どのような関係であっても見落さずに観察できるようにした。

#### 観察方法と被験者

野尻合宿は、寮が、野尻湖畔のすぐ水際に建っているため、主に水泳を中心にして、起床から就寝までの団体生活が行われる。起床、食事、掃除、学習、水泳というように、それぞれ場面場面によって、時間が決められているので、この各場面について一対の行動をみるように心がけた。

2人の関係ばかりではなく、この関係の基礎となる個々の行動も観察するようにした。

相互の関係については、出来るだけ、具体的な場面を、そのまま詳細に記録し、このような関係が、先に述べた2人の関係の中、どれに属するものであるか、明かに判るものは、その場でこれを記録し、観察者1人では判定しがたいようなものは、観察者全員が集って判定することにした。

このような目的に沿って、次のような観察用紙を用いた。

(記録者)

対 等	上 下	追 従
(1) 平行、独立	(1) 自然的上下 A, B B, A	(1) 歓心、無関心 A, B B, A
(2) 競争、対立	(2) 強圧、従属 A, B B, A	(2) 歓心、拒否 A, B B, A
(3) 協力、互助	(3) 強圧、逃避 A, B B, A	回 避
(4) 戯れ合い	(4) 強圧、拒否 A, B B, A	(1) 一方的回避 A B
	(5) 強圧、反抗 A, B B, A	(2) 相互的回避

観察期日 昭和 28 年 7 月 21 日～26 日

昭和 29 年 7 月 19 日～24 日

昭和 30 年 7 月 22 日～31 日

野尻合宿は中学一年生 120 名を 60 名ずつ 2 班にわけて行われ、昭和 28, 29 年度では双生児をまとめて 1 班にいれたのであるが、昭和 30 年度は男女でわけられたため、観察は 1 班、2 班を通じて行われた。また 28, 29 年度では観察期間は 6 日間であったが、30 年度は種々の事情により第 1 班の第 1 日と第 2 班の最終を省いた 5 日間ずつ観察した。

被験者 28 年度は 28 年入学した双生児 20 組のうち合宿に参加した EZ 男 6 組、女 5 組、ZZ 男 2 組、女 2 組、卵性不明男 1 組、PZ 1 組で合計 17 組を観察した。29 年度は 29 年に入学した 21 組のうち EZ 男 6 組、女 8 組、ZZ 男 2 組、女 1 組、PZ 1 組、合計 18 組である。30 年度は 22 組が入学し EZ 女 1 組をのぞき残り全員野尻にいつたのであるが、男女でわかれられたため PZ 2 組は観察できず、EZ 男 6 組、女 7 組、ZZ 男 3 組、女 3 組合計 19 組を観察した。

観察方法 28 年度は相互関係を中心課題として観察した観察者は 3 名で、他は双生児の行動全般の観察を目的とした東大医学部脳研究所関係の

観察者約 7 名と協同して観察が行われた。29, 30 年度の観察は東大教育心理学科の大学院学生及び学部学生と天羽が行い、29 年度は 6 人の観察者が 1 人で双生児 3 組ずつをうけもち、30 年度は双生児が 2 班にわかれていたため 7 人の観察者が 1 人で双生児 1 組ないし 2 組を受持った。そして観察期間中に先にのべた合宿生活の各場面を 1 つ 1 つ観察した。観察は被験者に気づかれないよう、かけで記録し被験者の自由な行動を妨げないようにした。毎晩被験者の就寝後集って観察結果について話しあい、また観察が主観的にならぬよう自分自身のうけもち以外の双生児についても互に観察しあった。更に帰京後観察者全員が集まって、各一対の相互関係について担当した観察者を中心に話しあい、記録用紙に記録された結果と話しあいの結果などを含めて、野尻の各生活の場面での相互関係について一对ずつまとめた。

但し 28, 29 年度は双生児が一対で同じ部屋にねおきしたため相互関係を観察する機会が多かったが、30 年度は学校の教育方針から別々の部屋にわかれていたため、前年度とはかなり異った観察条件であった。

合宿期間中を通してみられた相互関係を各対ごとに示すと第 23 表のとおりである。

第 23 表

相 互 関 係		対 等 関 係				上 下 関 係				追従関係		回避関係		
入 学 年 度	卵 性	氏 名	平 行 ・ 独 立	競 争 ・ 対 立	協 力 ・ 互 助	戯 れ あ い	自 然 的 上 下	強 圧 ・ 徒 属	強 圧 ・ 逃 避	強 圧 ・ 拒 否	歎 心 ・ 無 關	歎 心 ・ 拒 否	一 方 的 回 避	相 互 的 回 避
28	EZ. M	加 内 ○ 永 中 ○ 竹 館 ○ ○		○ ○ ○ ○ ○ ○			⊗ ⊗ ⊗ ○			○				
		折 入 ○ 石 鈴 ○ 内 ○	○	○	⊗	○	○	○	○					
		長 溝 ○ ○			⊗		○							
		佐 青 ○ ○			⊗		○					○		

入学年度	相 互 関 係		対 等 関 係		上 下 関 係				追従関係		回避関係			
	卵 性	氏 名	平行・独立	競争・対立	協力・互助	戯れあい	自然的上下	強圧・従属	強圧・逃避	強圧・拒否	強圧・反抗	歎心	歎心・無闇	一方的回避
	卵性不明 M	伊 ○					◎							
	PZ	加 ○												◎
29	EZ. M	青前萩油藤松 ○○○○○○	⊗ ○○	○○ ○○	○○	○								
	EZ. F	遠菊馬生庄倉河菊ヒ ○○○○○○○○○○	⊗ ○○	○ ○○○○○○○○○○	○ ○○○○○○○○○○	○ ○○○○○○○○○○	⊗ ⊗⊗	⊗ ⊗⊗	⊗ ⊗⊗					
	ZZ. M	安和 ○○	⊗ ○○				○							
	ZZ. F	藤 ○	○				○							
	PZ	勝 ○	⊗											○
	EZ. M	小広福保三山 ○○○○○○○○○○	○ ⊗ ○ ○	○ ○○	⊗ ○	○ ○○○○○○○○○○	○ ⊗							◎
30	EZ. F	一上小平持山 ○○○○○○○○○○	○ ○○○○○○○○○○	○ ○○○○○○○○○○	○ ⊗ ○○○○○○○○○○	○ ○○○○○○○○○○		○						
	ZZ. M	浅木花 ○○○		○			○○							
	ZZ. F	黒宮吉 ○○○	○				○○							
	結果総計	○ ⊗ ○	8 5 3	1 3 1	11 5 10	1 0 0	7 8 6	0 2 1	0 0 1	0 0 1	0 0 1	1 0 0	2 1 0	
	計	16	5	26	1	21	3	0	0	1	0	0	1	3

◎ 特にはっきりしている ⊗ ややはっきりしている ○ 僅かながらみられる

第23表の結果から次のようなことが考えられる。

- 1) 28, 29, 30年の観察を通して、相互関係では協力互助の関係がもっとも多くみられ、次に自然的上下関係を示すものが多くかった。特に28年の観察ではおたがいに非常に助けあっていながらその中に兄、弟らしい上下の関係がみられるものが多かった。
- 2) 次におたがいに対等の位置に立って個々に独立した関係にあるものが多くみられた。
- 3) 相手の御機嫌をとって追いまわすといった追従関係は一組もみられなかった。
- 4) 回避関係も少く4例のうち、2例はPZである。PZは2組しか観察できなかったがお互に回避する傾向が強い。
- 5) 強圧従属、強圧反抗といった一方が他方に圧力をかける関係は特殊なケース3組しかみられなかった。

すなわち、双生児対偶者間にみられる相互関係はおたがいに対等の立場にある場合がもっとも多く、そのなかでたがいに協力する関係にみられ、この協力関係のなかになにか緊張した場面などで僅かながら兄弟の序列から生じる上下関係がみられるといえる。

全体に対偶者の関係は非常に友好的でこれに反するようなケースは少数に限られる。

次に対等関係、上下関係、回避関係について代表的ケースをあげたいと思う。

### A 対 等 関 係

#### 1) 平行一独立の関係

##### 第1例 EZ M 906 藤○兄弟

双生児のなかでも、とりわけよく似た一対である。外貌、体格、行動ともに差を見出すのに困難を感じる程である。性格はともに神経質、無口で彼等が話しているのは、ごくまれである。しかしボソボソと独り言を言っていることが多い。感情をむき出しにすることは少く、真面目くさった顔で愉快なことも話す。行動的にはBの方が活動的であり、社交的であるが、他の双生児と比較すれば非常に僅かな差である。

まず起床から一緒に行動しない。一方が目覚め

ていれば、一方はまだ眠っている。一方が早く起きたかと思うと途中で着替えもしないで本など読んだりする。他の双生児は洗面道具など大抵共用であるが、彼等は各々“自分のもの”を持っている。洗面も同じ場所でやろうとせず、時間的にもいつもずれている。食事も決して並んで坐ろうとせず、必ず1人2人の間をおいて坐る。偶然Aの隣にBが坐ろうとした時があったが、Aのいるのを見て、わざわざ反対側の席に坐ろうとし、そもそも他の人に坐られて、とうとうAの隣に坐るということもあった。このような場合などわざわざ回避しているようであるが、一日の多くの時間は、2人の間で全く交渉はないが、お互に目のとどく範囲に何となく一緒にいることが多い。持物についての個人主義は徹底しており、お菓子なども決して人に与えたりしない。お互の間も決して交換せず、大きなようかんを別々にかじっていることもあった。小遣も全く別々に持ち、Bが作文で賞をもらい、日頃に似合わず相好をくずして喜んでいても、Aは少しも表情を変えず、無関心な様子で、表面的には少くともお互に相手の存在を意識しないという態度であった。

往復の車中ともに別々の席に坐り、2人で話し合うことは殆んどなかった。

このように全体的にみて、物理的な空間ではそれほど離れていても行動は全く別々で、お互の関聯はない。兄弟の関係も少しもみられずお互の名を呼びあうこともない。お互に影響されることをきらい、いわゆる自分の姿勢をくずさない。相手によって自分の意見を変更するよりも、独り言のように自分の考だけをのべる。自分と相手の存在を神経質にまで区別しようとする。

以上のように、平行、独立の関係を示す双生児は、お互の行動に少しも関聯がなく、藤○兄弟のようにお互に身近な場所にいることもあるが、このような関係を示す双生児は大抵全然別々に行動することが多い。例えばグループ学習の場合でも全く別々に行動したり、1人が外でボートにのっていると、1人は家の内で本を讀んでいるというようで、つきあう友達さえも、別であるといったものもあった。このような例は、特にZZに多くみられた。

## 2) 競争一対立の関係

### 第2例 EZF 876 内○姉妹

姉妹ともに社交的で、遊ぶ時などよく中心になっており、いろいろ遊びのルールなど自分で決めていったりする。どちらかというとAの方がより積極的で、Bはやや控え目、また素直である。

お互に競争意識が強く、なにかにつけてはり合っている。この傾向は特にAに強く、Bよりも劣ると、Bに対して攻撃的になる。例えば輪投げをしている時、Aが先にやり、あまりはいらなかつたら、後のBの番になると、“はいらぬように”とおまじないのような恰好をし、時々、積極的に示威的な態度を示すこともあった。又、水泳の時、Aは一番泳げる組、Bは中位の組にわけられたが、観察者が、Bにどっちが泳げるの？と聞くと、ぶすっとした顔で返事もしなかった。一日の生活は大体一緒にすごすが、なにかにつけて口喧嘩することが多く、AはBの言った言葉を皮肉にとることが多い。或朝洗面でAがおそくなり朝礼が始まるのに、まだ顔も洗っていないので、Bが“くづくづしてんのね”と言うと、Aは“わざとゆっくりしてんのよ”と言って、朝礼にもわざわざおくれてきたことがあった。

この例のように、競争一対立の関係を示す双生児の一番大きな特色は、2人の間にみられる強固な競争意識で、相手をいつも自分の競争相手としてみようとする態度である。

## 3) 協力一互助の関係

### 第3例 EZF 956 倉○姉妹

身体、相貌非常によく似ており、2人並んでいる時でも、後姿では殆んど区別できない。持ちものは共同のものが多く、スカートなども始終交換している。2人とも控え目、遠慮がち、無口で、ボートや和船に乗る時でも積極的に動かないで、いつも他のものに乗られてしまう。特に親しい生○姉妹以外とは殆んどつきあわず、無口で、いつも話の聞き手である。

2人の間の心理的、物理的な距離をとり上げるとしたら、合宿に参加した双生児のなかで、一番近い間柄といえるのではないかと思う。一日中終始、影の形に伴うように行動をともにする。おそらく実際に2mと離れていないと言っても、言い

すぎでないようである。合宿中1人でいるのを一度もみたことがない。例えば、食堂に坐る時はいつも並んで坐る。どちらか先にきたものが、相手の席もとつておく。たとえ一番親しい生○姉妹でも、その席にくると、“ここは××ちゃんのところだから”と言って坐らせない。ねる時にも、いつも1つのふとんで一緒にねる。

お互に非常に協力的である。例えば闘球盤で遊ぶ場合2人で対戦する時でも、相手を敵として考えるような態度は少しもみられず、“ほら、そこからやるといい”などとお互に教え合う。又相手が誰か他のものとやっている時は、横にべったりついていて、“ほらそこ”などと言って助ける。荷物の整理、押花の整理など、いつも協力一互助の典型である。

しかし、この間柄を詳しくみていくと、ややBがAにたよるという面もみられる。例えば珠算の時などBはAの答をみて、自分のとあってると手をあげたりする。しかし又このような場合も始めのうちはBのみがAの答をみていたが、後には2人でまず答をみせあい、それから手を上げるというように、2人の間の相互的な依存性もきわめて高いように思われる。

話も、1つの事柄について、交互に話し合い、時には1つの文章を1人が始めをいようと、もう1人がその後をうけて話すといったこともあり、第三者は、倉○姉妹と話しているというよりも、倉○という1人の人間と話しているような感じをうける。

このように全く一心同体で、協力、互助の関係にあるものと、お互に独自性を持つつ、対等な立場から互に助けあうというものもある。

例えば青○兄弟は、いつもシロさん、ゴロさんと呼び合って、一緒に行動することが多い。しかし、別に行動することもあり、グループ学習など別々にいって、Bが植物採集にいくと、Aが後で少しあってくれといって半分ずつにする。お互に自分より優秀な方は相手だとゆずりあう。2人とも体格もすぐれ、腕力も強そうなので、外観的には、いかにもけんかでもしそうだが、母の言によると家でも殆んどせず、合宿中でも決して争わない。2人がサイダーを飲み、一方だけが冷いのを飲んでいると、他方は“○○さんは冷い方でよ

かったな”といつて、お互にそのままあっさりしている。相撲の班対抗試合などで、一方が取り組んでいると、派手な応援はしないが、真剣に相手の様子をみつめている。彼等が一番互助的な場面をみせたのは、遠泳の時で、Aがおぼれそうになつたら、先の方を泳いでいたBが、戻ってきてAを助けようとしたことであった。

このように、お互に対等な位置にあって、相手をたて、危機的場面などでは、お互に助け合おうとする。およそ、対立、競争的な場面はみられず、対等でありつつも相互に依存的である。

#### 4) 戯れ合い

##### 第4例 EZM 916 油○兄弟

2人とも、ちょこちょこしており、ひょうきんで人を笑わせる。特にAはこっけいで、大勢の前で愉快な答をして、みんなを笑わせる。多弁で、落ちつきがなく、年上のものに甘えたりする。

お互に“ソーフ坊、ター坊”と呼び合って親密である。しかし、2人が一緒にいることがこの上なく嬉しいというようなものでなく、むしろ身近な位置にありながらも、それぞれ別々な自主的な行動を示す場合も多い。そして、直接的な交渉を持つ場合には、相互に悪口を云い合ったり、けなし合ったり、小犬のように戯れ合うのである。

寝床の位置は部屋の隅と隅で、一番離れており、2人とも、目がさめるのがおそく、ぐずぐずしているが、ふとんをあげる時など、協力するようなことはない。一度Bがあまりいつまでも起きようとしないでいると、Aは他のものと一緒にになって、Bの鼻をつまみ、ふとんむしにした。洗面なども場所は同じだが、いつも親密であるというのではなく直接交渉は少い。Bは和船にのって、自分でぐらぐらゆらしたりするが、Aは“ター坊、危いぞ、お前落ちるぞ”などという。この言い方が、本当は心配そうなのだが、表面的には相手をけなすように、からかったようにいいうのである。或日、罐詰を奪い合って、部屋から部屋へと走りまわっていたが、Aが罐をふんで、足から血を出すと、Bは早速ハンカチを持ってきて拭いてやった。又、帰りの車中で別々の車輪にのると、AはBのことを心配し、Bはまた荷物を持ってAのところにくるといった多少とも危機的場面

では、相手のことをしきりに心配する。しかし多くの場合では、このようにまとまつて相手を心配するという表情、態度はとらず、このような気持を茶化すように、互にけなしたり、ふざけあうのである。

このような彼等の関係の特色は、他の友達と離れて、2人だけで騒ぎまわる、漫才のようなこっけいな言葉のやりとりをすることを、非常に自然にやることである。多くの双生児は、2人一緒に仲良く行動しているものはあっても、このように動的に2人でころげまわり、けなし合うというようなことを、人の前で派手にするものは殆んどみられない。

彼等は非常に無邪氣であり、他人の存在など全く眼中にないよう行動する。悪口、取組み合いが多くても、結局彼等は仲が良いのであり、2人でふざけあうこと楽しんでいるように思われる。

## B 上下関係

### 1) 自然的上下関係

##### 第5例 EZ F 931 河○姉妹

2人とも大きく、健康優良児といった体格で、Bの方がやや小さい。おっとりして、日常の行動は活潑でないが、運動は上手で、特に水泳は女子の中で一番うまい。Bの方が、明朗で人づきがよい。Aは控え目で、Bの行動をちよつと年上のもののように見守ってやるというところもある。しかし、しっかりしている。実に仲がよく、何となく2人で近づいて肩をたたきあったり、××子さん、○○子さんと名前を呼びあう。このように対等で、協力的な場面もみられるが、他の双生児と比べてこの2人の関係の一番目立つ特色は、Aの姉的、Bの妹的態度である。Aはよく姉的態度でBに注意したり、たしなめたりする。Bはこれを、いつもにこにこして聞き入れて、それに従う。食事の時又集会の時などで、Bがすこし膝をくずしたりすると“まさ子さん？”といって注意する。又、朝の学習の時間には、2人ともよく絵をかいていたが、Bの方がうまいのか“よくかいて賞をもらうのよ”などといってAがBを励ますと、Bは“私うまいのよ”といって、ちょっと得

意そうに言ったりする。社会科の宿題をしらべている時など、Aは同室のもの達と懸命にノートしているのに、Bはのんきそうにねころんでいる。遠泳の時などもAが先に水にはいり、Bはそのあとについていくといったように、日常のいろいろの場面で、Aは指導的で、Bはこれに依存するといった姉妹らしさから生じる上下の関係がみられた。

自然的上下関係を示した双生児は、このようにきわめて協力的であるが、そのなかに姉妹的態度がみられるといった上下の序列の差がそれほど顕著でないものもあるが、なかには、同時に生れた双生児でありながら、普通の兄弟のように、一方は完全に兄であり、他方は全くそれに頼って弟といったものもある。

例えば、伊〇兄弟（卵性不明 M 839）は、帰京準備の時など、AがBのシャツを着せてやり、ズボンのごみを払ってやり、最後にBの頭に帽子をのせてやるといった工合で、Bは、こういうことがあたりまえのように、まわりの友人とさかんに話していた。万事この調子で、BはAがいなくなると、×坊×坊と、まるで子供がお母さんを呼ぶようにさがしまわる。

このような自然的上下関係を示す双生児においては、兄弟の関係がきわめて自然にうけいれられており、AがBに対して、暴力をもってBを自分の意志どおりにしようとしたりしない。2人の間はきわめて親密で、友好的である。

## 2) 強圧—従属の関係

### 第6例 EZ M 832 館〇兄弟

2人とも友達は少く、人気はない。しかし大勢一緒に遊ぶ時には元気よく遊ぶ。性格はやや暗い感じでAはより一層抑圧されたような感じである。

Aの方が自己中心的で、他人との協調性は皆無に近いが、Bは比較的に他人への遠慮などの心づかいもみられる。

2人とも始終はげしい取組合いのけんかを人前でも構わずにする。例えば、往きの車中で、Aは小学校の頃、少し病気をしたので、Bが荷物を沢山持たされたといって憤慨し、Aは兄である自分の許可なしに、Bがお菓子を食べたといって、まわ

りの双生児に、双生児じゃないみたいだといわれよう、はげしいけんかを始めた。

Aは兄としての特権意識が強く、自分の意志をあくまでも通そうとする。Bはこれに対して、割に従順に、Aの面倒をみ、Aはこれ全くあたりまえのようにうけとる。

例えば洗面の時、Bが洗面用具、タオルなどを持ってくると、Aは後からきたのにさっさと顔を洗い、無難作にBの手のタオルをとる。Bが、これは湯上りタオルだからといって、別のを渡そうとしても、知らん顔をして聞かず、おれの専用だといって、首にまきつけてしまう。又雨の日、やはり湖畔にてて洗面をする時、BはAに傘をさしかけてやっているのに、Aは自分がすむと、さっさと部屋にかえってしまい、Bは雨にぬれながら顔を洗う。

このように、Aの強圧的態度に多くの場合Bは従属している。しかしあとはげしい取組み合いをして、Bも反抗に出ることもある。しかしその結果はBが服従してしまうことだけりがつくことが多い。Bは仲良くなりたいということをもらしていることもあった。

しかしこのような2人の間とてても、何か他の条件で2人の間がさかれた時は、お互に心配しあうこともある。そして2人一緒になるとまたけんかがおこるのである。

このような2人の間では、同じように対立的な場合にみられる競争意識はなく、むしろあまりに不可解な、横暴なAの行動から想像されるように、なにか2人の間に、家庭の取り扱いその他などから、特殊な Complex があるのでないかと思われる所以である。

## C 回避関係

### 第7例 ZZ F 882 佐〇姉妹

ZZであるので、体格、相貌かなり異り、性格も違う。Aはあまり友達と一緒に遊ばず、しかし、しつかりしたものとして一目おかれているが、Bは子供っぽく、明朗である。

合宿中、同室おりながら、徹底的に一緒におりらず、往復の車中、又水泳などすべて別々に行動する。このため2人の間の交渉は、全然みられ

す、双生児としての2人の存在は全く目立たなかった。AはBの脇やかなのを、さけているようで、車中、Bがわざわざお菓子やお弁当をもってきてやつても、全く話しもせずに、うけとる。

このような回避関係が更にはっきりしているのは、異性の双生児で、全く別々に行動し、勝○姉弟などは、洗面用具など同じ袋にはいっているのに、Bははぶらしをとると、わざわざ50mもはなれた向側の棧橋について、顔を洗ったりする。このようにPZの場合には、お互の性の意識から回避するものと思われる。

## 2. 相互関係を規定するものについて

以上のように双生児の相互関係は一様のものではない。対等関係あり、上下関係あり、回避関係あり、決して一義的にかたづけられるものではない。

1つの受精卵から育ち同時に生れてきた人間が何故このようにいろいろの関係をかたちづくるのであろうか。ここに性格の形成過程を解明していく手がかりの1つが求められよう。

われわれはこの問題を、2人の間の兄弟意識あるいは共同体意識、2人の間の心身の力関係、2人の育てられた家庭環境などの面から追求していくと考えている。

まず双生児自身がおたがいに対偶者をどのように考えているか、例えば自分と同じような人間がもう1人いるということをどう思っているか。すなわち (1)対偶者をおたがいにたよりあうものと考へる。 (2)一方は相手をたよるものと考へ、他方は相手からよられるものと考へる。 (3)対偶者を競争相手と考へる。 (4)全く別の独立した2人の人間と考へる。というような考え方があろうが、このような考え方の基本には「自分の存在を相手の存在と1つのもの」と考へるか、また「自分の存在のそとに相手の存在を考へるか」ということによる相異があると思われる。

さらに相互関係を規定する原因の1つとして、2人の間の精神的、身体的な力関係が問題になる。即ち好むと好まざるとにかかわらず、2人が身近かにあるため何かにつけて比較の対象とされていることから、いささかでも2人の間の力関係の平衡状態が破れて、いずれかの方向にかたむい

た時には、その傾きは大きく意識され、依存関係、競争関係が生れてくると思われる。そしてまたそれは些細なものであっても常に意識されているので強く行動を規定するものとなり、やがてはペーソナリティーの深奥部にしみこんで行くものと思われる。

また、さらに外部的な環境のちがい、例えば家庭での兄弟の差別をつけた扱い方が2人の意識に働いて兄弟的上下関係を生じることもありうる。

そこでわれわれはこの3つの面即ち相互間の意識、力関係、家庭環境から、相互関係を規定するものについてみていきたいと考えているのであるが、ここでは特に相互間の共同体意識をとりあげ、相互関係と関連づけて2人の間の兄弟的性格の差違をみていくと思う。家庭環境が2人の性格に及ぼす影響については別稿“兄弟的性格差違と家庭での取扱い”で述べ、相互間の力関係については一般的な性格のちがいと結びつけて目下研究中である。

### a) 共同体意識

共同体意識という言葉は一定の定義の下に用いられているわけではなく、この語義自体についても今後究明していくなければならないが、一応双生児相互間を結びつけ、2人が一体的なものであるという意識、2人の間の意志の疎通を助けているものというような漠然とした友好的意識を考えることにする。

この共同体意識があらわれそなSCT及び質問項目を作る。

この実施は28年入学児については28年9月野尻合宿後2ヶ月に行い、29年入学児については29年4月野尻合宿前3ヶ月に行う、30年入学児については30年度中にSCT形式での共同体意識の調査が種々の都合で行われなかつたので30年入学児は除いた。

28年入学児の結果は古畑和孝氏の行ったものを引用する。(教育心理学研究、第2巻2号に報告)これは共同体意識についてのSCT7項目と種々の21の質問項目からなるがこのうち特に共同体意識に関連のある質問項目をまとめた結果のみを用いる。SCT及び質問項目のまとめは次のようなものである。

1. もしも相手がいなかつたら……
2. 私は私の相手に……
3. 私達2人は……
4. 小学校に入った頃私達2人は……
5. 私達2人で一緒に仕事をすることは……
6. 私は双生児であるので……
7. 私は将来相手と……と思うと……
8. 双生児であることに対する態度(以上SCT)
9. 他の兄弟、独り子のよい場合の有無
10. 仲のよさ
11. 意志の疎通

29年入学児については次に示すような 共同体意識に関する SCT 13 項目と他の目的も含んで行った質問紙の中からこれに関連のある 3 項を用いた。(SCT の中 28 年入学児に行った SCT 1, 7 と重複する 2 項目を除く)

1. 相手が悲しそうにしていると……
2. もしも相手と遠くにはなれて住まなければならぬとしたら……
3. 私達2人の仲は……
4. 双生児であることが……
5. もしも相手が他の人とけんかなどしているのを見ると私は……
6. この世の中に自分ととてもよく似た人がいることは……
7. もし双生児でなくただの兄弟として生れたら……
8. 相手がみんなからいじめられているのを見ると……
9. 相手がみんなの前でなにか失敗した時……
10. 電車のなかで2人ならんでこしかけている時、私は……
11. 自分の気持を一番よくわかってくれるのは……

(以上SCT)

12. 相手と別々にいる時、相手のことを考えるか
13. 2人だけに通じる信号や合図があるか
14. 相手と同じ着物をきたいと思うか

この結果を S C T では各項目毎に共同体意識のみられるものを+、みられないものを-、いずれともわからないもの?とした。また質問項目につ

いても同様に分類し、各対にして A児 B児別々にその+の数を数えた。そしてこの+の合計数について被験者全体での分散をとり、共同体意識の顕著にみられるものAを、ややみられるものをB、みられないものをCの段階にわけて評定した。

個々の結果は省略し、この共同体意識と野尻でみられた相互関聯との関連をみると、第24表のようになる。(EZ 25組、ZZ 7組、PZ 2組、卵性不明 1組計 35組)

第 24 表

相 互 関 係	共 同 体 意 識			
	A	B	C	
対等関係	平行独立	3	6	9
	競争対立	1	3	0
	協力互助	11	8	1
	戯れ合い	0	0	2
上下関係	自然的上下	8	6	4
	強圧、従属	1	0	3
回避関係	一方的、相互的	0	1	3

数字は人数

結果の考察 各自の個性に従って別々に行動する平行、独立の関係を示す双生児は共同体意識は C の段階を示すものが多く、従って低い。これらのものの殆んどは2人の仲はわるいといい、双生児であることをいやがっている。

これと反対に相互に助けあう協力、互助の関係を示すものは共同体意識が高く、A段階のものが 11人、C段階のものは 1 人にすぎない。これと同じような傾向を示しているものが、兄弟的関係を示す自然的上下関係のもので比較的に共同体意識が高い。これから兄弟的な上下関係が2人の共同体意識を低くするものではないと考えられる。更に強圧、従属関係を示す双生児では共同体意識も低い。また回避関係を示す双生児も共同体意識は低く、これらの双生児は ZZ と PZ であった。

このようにみると相互関係に特定の方向性を持たず要因の1つとして、共同体意識が大きく働いていることが考えられる。

### b) 兄弟的性格差違

2人の間にいくらかでも性格的な差違があるとすれば、これは2人の相互の関係にもなんらかの影響を与えていていると考えられる。そこで、兄弟的性格差違をとりあげて、これと相互関係との関連をみた兄弟的性格差違については別稿“兄弟的性格差違と家庭での取扱い”のなかに詳述されている質問項目を、双生児本人達2人と母親に行って、この3人の結果をまとめて各対の兄弟的性格差違を示す得点と考えた。これについて、兄弟的性格差違のみられるもの(A), ややみられるもの(B), みられないもの(C)3段階に評定した。この結果と相互関係との関連を示したのが、第25表である。

第25表 相互関係と兄弟的性格差違

相 互 関 係		兄弟的 性 格 差 違		
		A	B	C
対 等	平 行 一 独 立	3	7	3
競 争	一 対 立	2	1	0
協 力	一 互 助	3	6	7
戯 戯	れ 合 い	0	0	1
上 関 係	自 然 的 上 下	6	8	1
下 係 係	強 庄 一 徒 属	0	0	2
回 避 係 係	一 方 的 回 避	1	0	0

数字は 組数

この対象となったのは EZ 37組, ZZ 14組である。(PZは除く), この表からはっきりした傾向を擗むことはできないが、協力互助の関係を示す双生児は兄弟的性格差違を示すものが他に比較して少く、自然的上下関係を示す双生児は兄弟的性格差違のみられるものが多い。

このように、兄弟的性格差違と調べる質問項目によっては、ごく大づかみに外面向的兄弟的性格差違をつかむことはできても、相互関係を形成する更に深い面について両者の性格的差違をつかむことはできなかった。

そこでもう一度、前に述べた共同体意識について、単に共同体意識と相互関係の数量的な関連を示すだけでなく、共同体意識そのものについて、もう少し深く考察することが必要であると思われる。

### む す び

この報告は双生児研究の手はじめとして、双生児のいる学級集団とは一体どういうものかという素朴な問をもって、行動観察と Sociometry の2つの方法を使って3ヶ年にわたって継続的にみてきたものをありのままに示したものである。そして一応双生児のいる学級集団について大づかみな知見を得ることができ、またそこから今後研究すべきいくつかの問題をつかんだわけである。そこで学級の指導というような教育的見地からみると一部に心配されていたような双生児がいるために、学級に特別な集団が形成されるというようなことはなく、双生児のいる学級集団といつてもあまり特殊な集団形成はみられなかった。また双生児同志のむすびつきは決して一様でなく、いつも一緒にいるものから、はなれているものいろいろの型がみられたが、かようなむすびつきも、学級全体の集団形成には殆んど影響を与えないようであった。

われわれは、こうした観察から、双生児間の兄弟的性格差異の問題や相互関係の問題に関心をもち、その方面的研究に方向をむけて、一般に性格の形成の問題について考察して行こうとしているが、他方、附属学校自体においても、一对の双生児を別々のクラスに入れる学級偏成法をとって、双生児法による学習指導法の研究に進まれつつあるので、この観察記録は、その方にも、何らかの参考になると思う。

本研究については、行動観察に当ってもらった学生諸君のほか東大教育学部附属学校教官諸氏の御協力をいただいた。ここに謝意を表する。